
曇り空の向こう

上原直也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曇り空の向こう

【Nコード】

N4772F

【作者名】

上原直也

【あらすじ】

池田正行という二十八歳の青年の、とある日常や、想いを綴った小説です。

第一話

川島優貴がその言葉を口にしたのは、映画を観終わって、映画館近くにあるレストスランで食事をしているときだった。

「わたしたち別れたほうがいいと思わへん？」

川島優貴は俯き加減に言った。

池田正行は彼女の言葉があまりにも唐突だったので、口に運びかけていたお冷のグラスを思わず取り落としそうになった。

池田正行が咄嗟のことに上手くりアクションできずにいると、

「わたしたち別れたほうがいいと思うねん」

と、優貴はさっきと同じ科白を繰り返して言った。

「いきなりやな」

と、池田は動揺して言った。

「なんでなん？」

と、池田は尋ねてみた。それから、手にしているお冷のグラスをそつと慎重にテーブルの上に戻す。万が一落として割ってしまいでしたら、自分たちの関係は完全に終わってしまうような気が、池田はした。

池田の思い出せる限り、自分たちが別れなければならない理由はどこにも見当たらないように思えた。浮気もしていないし、喧嘩もしていない。

「なんか俺に悪いところがあるんやったら直すしな」

池田は優貴のことが好きだった。だから、別れたくはなかった。

「べつに池ちゃんに悪いところがあるわけじゃないねん」

と、優貴は眼差しを伏せたまま申し訳なそうな口調で言った。

「じゃあ、なんでなん？」

池田としては別れなければならない理由が知りたかった。

優貴はテーブルのうえのお冷を手にとって一口口含んだ。それから、手にしていたお冷のグラスをテーブルのうえに戻すと、食べ終えたばかりの料理の皿のうえに眼差しを落とした。そうして少しのあいだそのままでいたあと、彼女は意を決したように顔をあげて池田の顔を見ると、

「べつにはつきりとした理由があるわけじゃないねん」

と、言った。

「でも、なんかな、最近自分の気持ちがよくわからへんくてな」

と、優貴は言葉を続けた。そう言った彼女の声は泣き出しそうに微かに震えた。泣きたいのは自分の方だと池田は思ったが、口に出して何も言わなかった。

「だから、ちよつとのあいだ距離をおきたいねん。自分の気持ちを整理する時間が欲しい」

池田としてはそう言われてしまうと頷くことしかできなかった。

池田にできることがあるとすれば、そうして距離をおいているあいだに、彼女の気持ちがいい方向に変わってくれることを願うことだけだった。

レストランを出たあと、池田はいつも通り車で優貴を彼女の家まで送っていたが、その車のなかでの彼女の表情はどこか思いつめた様子で、これはもうほんとうにだめかもしれないな、と、池田は諦めるように思った。

池田は一人暮らしをしている自分の部屋でソファーにうえに仰向けになって横になりながら、今日一日の出来事を思い返していた。

最近の仕事が忙しくて、このところは優貴とは会えない日が続いていた。今日のデートも一ヶ月ぶりくらいのことだった。優貴が別れたいと口にしたのは、もしかしたらそのことが原因なのかなと池田は想像したが、しかし、それにしても今日デートをしているときの彼女の表情は楽しそうだった、と、一方で府に落ちなかった。

今日、最後に、映画を見終わったあと、あのレストランで食事をするときまでは全てが順調にいつているように池田には思えた。来月は彼女の誕生日だし、そのこの話もしようと池田は考えていた。

それなのに、何故あそこであんな展開になってしまったのだろう、と、池田は不可解だった。もし自分に対して何か不満があるのなら、どうして彼女は今日最初に会ったときにそのことを口にしなかったのだろう。どうして別れたいと思っている人間と過ごすときに、あんな楽しそうな表情をすることができるのだろう。

池田は考えれば考えるほど理解できなかった。

池田が川島優貴に出会ったのは、今から三年前だ。知り合いのコンパに参加したときだ。出会い方としてはごく平凡だが、それでも池田はこれまでに付き合ってきたどの女性よりも真剣に優貴のことが好きだった。

三年も関係が続いたのは、池田にとってはじめての経験だった。いつもはどんなに頑張っても一年が限界だった。それも決まって池田の気持ちが冷めてしまう。池田はもしかしたら自分は飽きっぽい性格なのかなと心配していたのだが、でも、優貴と付き合ってみてそうではないことがわかった。池田は優貴と付き合いはじめてから一度も気持ちが冷めたことはなかった。やっとうに好きなひとと巡り合うことができた、と、池田は思っていた。

それなのにこんな結果になってしまふなんて。でも、現実なんて所詮そんなものかもしれない、と池田は自分自身に言い聞かせるように思った。やっとうにほんものに出会えたと思った瞬間、それはすぐに失われてしまうのだ。

第二話

「池田さん、会社終わったあと、ちょっと時間あります？ちょっと相談に乗ってもらいたいことがあるんですけど・・・」

そう遠慮がちに声をかけられたのは、池田が会社の給湯室で自分のぶんのコーヒーをいれているときだった。

池田が手にしていたコーヒーカップを手に持ったまま、背後を振り返ると、そこには中島真由がどこか居心地悪そうな表情を浮かべて立っていた。

「いつの間にそこにおったん？」

と、池田は中島真由に笑いかけて言った。

「さっき、池田さんが給湯室に入ってくのが見えたから、急いできたんです」

と、中島はいくらかきこちなく口元を笑みの形に変えて言った。

中島真由は、池田よりも四つ年下で、今年二十四歳になる。中島真由が池田の勤めている会社に入社してきたのは一年前のことだ。

中島はどういうわけか、池田のことを慕ってくれていた。お互い洋楽を聴くのが好きで趣味が合うというのがその理由のひとつかもしれないが、池田は後輩に慕われて悪い気はしなかった。それに単純に、中島は可愛かった。

他の会社の同僚にも可愛いひとやきれいなひとはいるのだが、そのなかでも群を抜いている、と、池田は思っていた。というか、もっとはつきり言ってしまうえば、中島は池田の好みのタイプだった。

その色が白くて華奢な感じや、林檎色のふつくらとした頬の感じや、明るい表情は、池田に昔好きだったひとのことを思い出させた。

池田は彼女の顔を見ると、いつも高校生のときに好きだったひとのことを思い出すことになった。もし優貴と付き合っていなかったから、自分は彼女のことを好きになっていたかもしれないな、と、池田はたまに思うことがあった。

「相談って、仕事のこと？」

と、池田が怪訝に思っ て尋ねてみると、

「仕事のことといえば仕事のことなんですけど・・・」

と、中島はそれまで浮かべていた笑顔を打ち消して、いくらか歯切れの悪い口調で答えた。その中島の様子からして、会社のなかではあまり話したくないことなのだろうな、と、池田は見当をつけた。

池田は自分の腕時計に視線を走らせると、

「今日、ちょっと残業せなあかんくて帰るの九時くらいなるかもしれないけど、それで良かったら大丈夫やで」

と、池田は答えた。

中島は池田の返答に軽く頷くと、わかりました、と、答えた。それから、わたしどこか会社の近くで時間潰してますね、と、中島は続けると、池田に向かって軽く会釈をして、そのまま給湯室から去っていった。

池田は片手にコーヒークップを持ったまま、去っていく中島のどこか思いつめたような後姿をぼんやりと見送った。

池田は仕事が片付くと、中島に今仕事が終わった旨をメールで送った。すると、電話がかかってきて、会社近くのカフェで待っていることを彼女は伝えてきた。

池田は会社を出ると、すぐにそのカフェに向かった。

池田がアイスコーヒーを買って店内に入っていくと、すぐに後ろから「池田さんこっち」

と、声が聞こえた。振り返ってみると、中島が奥のソファ席に座って池田に向かって片手を上げているのが見えた。池田は彼女の姿を認めると、彼女が座っているソファ席まで歩いていって、彼女と向かい合わせに腰かけた。それから、プラスチックの容器に入っているアイスコーヒーの蓋を開けて、ガムシロップとミルクをひとつずついれてストローでかき混ぜる。

「今、仕事終わったんですか？」

池田がストローでアイスコーヒーを一口口に含むのと同時に、中島が尋ねてきた。池田は正面に座っている中島の顔に視線を向けると、頷いた。

「大変ですね」

と、感想を述べる中島に対して、池田は微笑すると、

「いや、今日はまだそうでもないで」

と、答えた。

「もっとひどいときは終電なくなってからタクシーで帰ることもあるしな」

「やっぱり経験が増えると、そのぶん任せられる仕事も多くなって、大変なんですね」

と、中島は池田の科白に少し不安そうな表情を浮かべて言った。

「いや、でも、そんないつも残業してるわけじゃないしな」

と、池田は彼女を安心させるように微笑みかけて言った。

「今日はたまたまやで。俺もいつもはだいたい中島さんと同じくらいに帰ってるで。残業してほんとに遅くなるのは月に二三回くらいのもんやで」

「そっか」

と、中島は池田の返事を聞いて安心したのかしていないのか、曖昧に頷くと、机のうえにおいてあるアイスティーを手にとって一口飲んだ。つられるように池田もアイスコーヒーを飲んだ。

「それで、俺に相談したいことってなんなん？」

と、池田は手にしていたアイスコーヒーのカップをテーブルのうえに戻すと、冗談めかして明るい口調で言った。

「もしかして会社のなかに好きなひとがあるとか？」

池田の問いかけに、中島は沈んだ表情で短く首を振った。それから、中島は迷うように一度眼差しを伏せてから、再び顔をあげて池田の顔を見ると、

「池田さん、大島主任のことどう思います？」

と、どこか思いつめたような口調で中島は言った。

「大島主任？」

と、池田は中島の質問の趣旨がわからなくて繰り返して言った。

「大島主任がどうかしたん？」

と、池田は尋ねてみた。池田は正直言って主任のことがあまり好きではなかった。主任は池田が何かひとつミスをする、いつまでもそれをネチネチと冗談にして嫌味を言ってくるし、自分は大して仕事はしないくせに、あれができていないこれができていないというさいのだ。でも、それは個人的なことなので池田は黙っていた。

「・・・なんか最近ひどいんですよね」

と、中島は池田の問いかけに少し躊躇ってから口を開いた。

「ひどいって？」

と、池田が話しの続きを促すと、

「なんかセクハラみたいなの」

と、中島は俯き加減に短く答えた。

池田が中島の意外な言葉に戸惑っていると、

「最初は言葉で言ってくるくらいでそんなに大したことなかったんですけど」

と、中島は続けて説明した。

「でも、最近は露骨に身体とか触ってきて、それでわたしが抗議しても、ただ笑ってるだけで、全然聞いてくれる感じじゃなくて」

池田は中島の告白を聞いていて、主任が自分の知らないところでそんなことをしていたのかと腹が立った。前々から人間として尊敬できないひとだなとは思っていたが、やっぱりそういうひとだったのか、と、池田は改めて嫌になった。

「それは最低やな」

と、池田は呆れて言った。

「ほかのひとにもそんなことしてるん？」

と、池田が気になって尋ねてみると、

「みんなも同じかどうかはわからないんですけど、でも、わたしと仲のいいかなちゃんとはやっぱりそういうのあるみたいです」

と、中島は同僚の女の子の名前を挙げた。

「それ、部長とかに相談したらいいんじゃない？」

と、池田は本気で腹が立って言った。

「部長とかに言ったらなんとかしてくれるやる？」

「でも、あのひと、主任、上のひとと結構仲良いじゃないですか？だから、わたしなんか何か言っても、真剣に聞いてもらえないような気がして」

「なるほどなあ」

と、池田は中島の話に頷いた。確かにそういうことはあるかもしれないな、と池田は思った。主任は部長や総務と仲が良い。そもそも池田の働いている会社は主任の親族が経営している会社だ。だから、たとえば彼女が相談しても、主任が適当に言い訳して誤魔化されてしまう可能性はあった。

「それに」

と、中島は池田が黙っていると言葉を続けた。

「もう、なんか主任みたいなひとがいるところで働きたくないんですよね」

と、中島はポツリと言った。

「そっか」

と、池田は中島の言葉にただ頷くことしかできなかった。

「中島さん、結構仕事頑張ってたのに残念だな」

と、池田は小さな声で言った。

池田の知っている限り、中島は会社のほかの誰よりも一生懸命に仕事に取り組んでいる印象があった。池田は彼女の仕事に対する前向きな姿勢に密かに感心していたのだ。そんな彼女の前向きな意志や、頑張りが、ひとりの人間の自分本位な行動によって無為に潰されてしまうのだと思うと、池田は悔しかったし、憤りを覚えずにはいられなかった。

「やっぱりだめもとで部長とか社長に相談してみたら？」

と、池田は少しの沈黙のあとで言った。

「中島さんは何も悪くないのに、主任のせいで辞めるなんて悔しくない？」

そう言った池田の科白に、中島は顔を俯けたまま何秒間のあいだ黙っていたけれど、

「それはわたしも思ったんですけどね」

と、やがて中島は口を開くと言った。

「でも、たとえそうやって部長とかに報告して、主任が注意されたとしても、そのあと主任とは一緒に仕事していくことになるわけじゃないですか？そしたら、気まずいし、嫌だなんて思っただけで会社辞めるなんてほんと悔しいんですけどね、でも、やっぱりなって思っただけ……」

「そっか」

と、池田は中島の話に頷いた。池田は彼女のために何かしてあげたいと思ったが、何をどうしたら良いのかわからなかった。咄嗟に池田が思いついたのは、主任の顔を思いっきり殴ってやることだったが、そんなことをしても何の解決にもならないことはわかりきっていた。

「なんか今日は話を聞いて頂いてありがとうございました」

と、しばらくの沈黙のあとで、中島は顔をあげると、少し無理に微笑んで言った。

「こんなこと池田さんに話してもしょうがないし、すごく個人的なことでも申し訳ないんですけど、でも、なんか誰かに話さないと自分の心に上手く整理がつけられそうになくて」

「いや、そんな気にせんでもいいで」

と、池田は微笑んで答えた。

「俺のほうこそ、何も力になってあげられへんくんでごめんな」

と、池田は謝った。

「ううん。池田さんに話してちよつとすつきりした。残業で疲れてるのに、つき合わせちゃってごめんなさい」

中島はどこか哀しそうな笑顔で言った。

第三話

4

池田は中島の話聞いて以来、ますます主任のことが嫌いになっていった。主任が池田に対して嫌味や小言を言うたびに、池田は中島の話を持ち出して、彼を断罪したいような衝動に駆られた。

でも、そうしなかったのは、保身のことを考えてだった。あからさまに主任と対立すれば、そのあと会社で働きづらくなってしまっだろう。下手をすれば辞めなければならなくなるかもしれない。

保身のことを考えて行動を起こさないというのも情けなかったが、しかし、生活していくためにはお金が必要だし、そのお金を得るためには今の会社を辞めるわけにはいかなかった。貯金もほとんどない。

あるいは今の会社を辞めて転職するという手もなくはないだろうが、しかし、池田は今の仕事にやっとなれてきたところだったし、それに第一、主任のためにどうして自分が会社を辞めなければならなんだという気がした。辞めるべきなのは主任の方じゃないのか。

また中島のことを考えると、いま主任のセクハラの問題を取り上げるのは得策ではないような気がした。中島が裁判を起しても主任と争う覚悟があるならべつだが、たぶん中島はそこまでは考えていないだろうと池田は思った。

いま主任のセクハラの問題を追及すれば、おのずと中島に好奇の視線が注がれることになる。そのことで中島が変に注目をあびたり、

傷ついたりするのが池田は心配だった。

もし、どうしても主任のことが我慢できなくて、本格的に主任と争うとしても、それは中島に迷惑がからないように、彼女が会社をやめてからにしようと思つた。

5

いつも通り毎日は慌ただしく過ぎていき、やがて週末がやってきた。

いつもは心持にしているはずの週末も、今回はあまり心が弾まなかった。というのも、何も予定がないからだ。池田は週末いつも優貴と過ごす時間に宛てていた。でも、先週あんなことになってしまった以上、今週はひとりで時間を潰すしかなかった。

池田はあの日から一度も優貴とは連絡を取っていなかった。メールも電話もしてない。もちろん、優貴からの連絡もなかった。

池田はケータイの着信履歴を見て、落ち込まずにはいらなかった。上手くいけば、この一週間のあいだに彼女の気持ちが良い方向に変わるんじゃないかと池田は期待していた。でも、そういうことにはならなかったらしい。

池田は迷ってから優貴にメールを送ることにした。自分が真剣に優貴のことを想っていること。もし自分に悪いところがあるのなら、

できるかぎりなおそうと思っていること。

しかし、池田が送ったそのメールに対して、返事が帰ってくることはなかった。

池田は優貴にメールを送ってから、返事が気になってずっと部屋で待機していたのだが、朝に送ったメールの返事は、昼が過ぎ、夕方過ぎてても、帰ってこないままだった。

池田はもしかしたら彼女は仕事が忙しいのかも良い方向に考えてみたが、優貴は派遣社員で土日は完全に休みのはずだったから、仕事が忙しくてメールを返す暇がないということは考えにくいことだった。

もちろん、何らかの事情があって休日出勤しているという可能性はあったし、他にもメールを返せない事情はいくらでも思いつくことはできたが（たとえばケータイを紛失したとか）でも、なんとなくそうではないような予感が池田はした。

優貴は意図的にメールを無視しているのだと池田は感じた。そう考えると、池田は我ながら女々しい男だなと思いつつも、気持ちが沈んでしまうのをどうすることもできなかった。

第四話

6

池田は部屋に居ると、どうしても優貴からのメールが気になってしまうので、もう夜の八時を過ぎていたが、気分転換に車で出かけることにした。

愛車のラブフォーの乗り込み、夜になって落ち着きつつある土曜日の街を走る。

この車は大学生のときに無理をしてローンで買った。中古で買ったのでたまに調子が悪いときもあるが、でも、まだ十分に走る。そういうえば、この車で優貴とはずいぶん色んなところに出かけたな、と、池田はつい感傷的な気分になった。

他人から見たらたぶんこんな感情は滑稽で、自分に酔っているようにしか映らないのだろうが、しかし、そうとわかっていても、池田は下降線を描いていく自分の気持ちを抑えることができなかった。

思いつくままに車を走らせてやがて池田が辿り着いたのは港だった。池田は車を止めると、車の窓から見える港の明かりをぼんやりと眺めた。

フェリーだろうか、大きな船が止まり、その周囲の、淡いオレンジ色がかったネオンの光がきれいだった。そんな淡い色合いの温かみのある光は、池田の心を慰めるでもなく、池田の心に静かに体積

していった。

池田は長いあいだそうして港の明かりを眺めていてから、また車を運転して自分の町まで戻った。車を運転したことで、さっきまでふさぎ込んでいた気分も、少しはマシになった気がした。

池田は車で自分のアパートまで戻る途中で、ふと思いついてレンタルビデオ店に寄ることにした。家に帰っても退屈なので、なにか時間を潰すためにDVDでも借りようと思ったのだ。

池田が立ち寄ったレンタルビデオ店は本屋も一緒に入っている。池田はせっかく機会なのでDVDを借りたついでに何か面白そうな本でもないかと見て回ることにした。

本屋の目立つ場所には、今売れている小説が平積みされていた。池田は試しにその本を手にとると、パラパラとページを繰ってみた。なんでもこの小説は、人気のある芸能人がはじめて書いた小説らしい。

池田ははじめて小説を書いた人間が最初からこんな商品になるような小説を書くことができるなんてすごいなと感心する一方で、東京の友人のことが少し不憫にもなった。

池田の大学時代の友達にはひとり、東京に出て、アルバイトをしながら小説を書いている人間がいる。その友達とはたまにメールでやりとりをしているのだが、彼の話では、今のところ彼が小説家としてデビューできる見込みはなさそうだという話だった。結局全てのことはめぐり合わせだし、誰が悪いわけでもないのだが、池田は友人のことを考えると、少しやりきれない気持ちにもなった。

池田がそうやって本を手にとったままぼんやりと考えごとをして
いると、

「なにしてん？」

と、急に背後から声をかけられた。

池田が驚いて後ろを振り返ってみると、そこには泉谷太陽が笑顔
で立っていた。泉谷太陽は、池田の高校のときからの友人だ。今で
も定期的に飲みにいったりしている。

「びっくりしたわ」

と、池田が呟くように言うと、

「びっくりしたじゃあらへんがな」

と、泉谷は笑って言った。家が近所なので、泉谷にはこうして
たまにばったり遭遇することがある。

「何か買うん？」

という泉谷の問いに、池田は頭を振った。

「いや、もうDVDは借りててな。せつかくやし、どんな本がある
んやろって見とっただけやで」

池田はハリウッドのアクション映画を一本借りた。

池田の返事に、太陽は曖昧に相槌を打つと、

「もし暇やったら、これから飯食いにいかへん？」

と、唐突に提案してきた。

「そつやなあ」

と、池田は頷くと、自分の腹に手をやった。考えてみると、今日
昼にパスタを食べてから何も口にしていなかったことに、池田は今
更のように気がついた。

「じゃあ、すぐそのファミレスに行こうや」

と、泉谷は池田の返事を待たずに勝手に決めて言った。

泉谷はレンタルビデオ店まで自転車であつたので、帰りに自転車はまた取りに戻ることにして、池田の車で一緒に車でファミリーレストランまで向かうことになった。

ファミリーレストランはレンタルビデオ店から車で十五分程走ったところにある。

駐車場に車を止めると、ふたりは店に入った。

店内に入ると、大学生くらいの髪の毛を明るい茶色に染めた女の子が、いくらか面倒くさそうにふたりを奥の窓際の席に通してくれた。

ファミリーレストランはさすがに休日の夜ということもあつて混雑していた。学生風の男女の入り混じった集団や、五十歳代くらいの男性の集団など様々なひとたちがいて、それらのひとたちがあげる喋り声や、笑い声で、店内は少し騒がしいくらいだった。みんな楽しそうで、悩み事なんてなにもないように見える。

池田は席につくと、何を食べようかと早速メニューを手を取った。そしてそのときに、ふと窓ガラスに映った自分の顔を見て、池田は違和感を覚えた。

そこに映っている自分の顔が、まるで他人の顔みたいに見えるのだ。今日はもともと出かける予定ではなかったたので髭は剃っていない

かったし、おまけにメガネを（普段はコンタクトをしている）かけているせいで、五つくらいは付けて見えるような気がした。そしてただ単に付けて見えるというだけじゃなくて、自分の顔は何かにくったりとつかれきっているように見えた。

席に取りけられている呼び出しボタンを押してウェイトレスを呼び、池田はハンバーグ海老フライのセットを注文し、泉谷はカツカレーを注文した。

注文した料理はすぐに運ばれてきて、その料理を食べながら、池田と泉谷は思いつくままに話をした。お互いの仕事の話（泉谷は建築事務所に勤めている）や、最近観た映画の感想。共通の知人に関する話題。天気の話。

泉谷が最近同棲している彼女と大喧嘩をしてしまったという話をはじめたのは、お互いに料理を食べ終わったあとだった。

「いや、実はな、この前、彼女と大喧嘩してん」

と、泉谷はお冷の入ったグラスを口元に運びながら何故か楽しそうな口調で語った。

「そうなんや」

と、池田は答えようがなかったので、とりあえずという感じで相槌を打った。

「何が原因で喧嘩になったん？」

と、池田がふと気になって尋ねてみると、泉谷は、

「いや、俺が彼女の誕生日を忘れとってな」

と、苦笑して答えた。

「それはいずちゃんが悪いよな」

と、池田は半ば呆れてコメントした。

「でも、しゃあないんやつて」

と、泉谷は池田の科白に開き直って答えた。

「その前の日とかや、仕事ですつと徹夜が続いって、ほんとに死にそうやつてんから」

「でも、それはいいわけにならへんで」

と、池田は軽く笑って意見を述べた。

「忙しくなるのわかってねんから、あらかじめべつの日に誕生日プレゼント渡すとかしといたらよかったやん」

「まあ、そうなんやけどな」

と、泉谷は認めた。

「でも、仲直りはできたんやろ？」

と、池田が確認を取ってみると、

「一応な」

と、泉谷は短く頷いた。

「でも、その変わり、めっちゃ高い鞆買わされたけどな」

と、泉谷は苦笑して続けた。

「まあ、それくらいはしゃあないやろ」

と、池田は泉谷の不満そうな表情が面白くて少し笑った。

「池ちゃんは最近どうなん？彼女とは上手くいってんの？」

と、泉谷は再びテーブルの上のお冷を手にとると、改まった口調で尋ねてきた。

池田は泉谷の問いにどう答えるか、少し迷った。というのも、いま彼女に振られかけているということを告げるのが、なんだか格好悪い気がしたからだ。でも、軽く躊躇ったあと、正直に告げることにした。というより、池田は誰でもいいから相談したくなったのだ。

優貴のことについて。どうしたらいいのか。

池田は軽く言い淀んでから、この前の優貴とのいきさつを太陽に話して聞かせた。デートの帰りに突然別れたいと告げられたこと。でも、池田はまだ別れたくないと思っっていること。今日久しぶりにメールを送ってみたのだが、未だに返事がもらえずにいること。

泉谷は池田の話を聞き終えると、

「それはヤバイな」

と、微笑して答えた。

「池ちゃん、何かしたんちゃう？」

「いや、べつになんも心当たりはないねんけどな」

と、池田は泉谷の言葉に力なく笑って答えた。

「強いていえば、ここんどこずつと仕事が忙しくて会えへん日が続いてたっていうのはあるかもわからんけど」

「たぶん、原因はそれやで」

と、泉谷は池田の科白に笑って言った。

「池ちゃんがなかなか会ってくれへんから、すねてるんやって。きつと」

「そうなんかなあ」

と、池田は言ってから、軽く首を傾げた。それから、テーブルの上のお冷を手にとって口に含む。

もし、泉谷の言っている通りだしたら、まだ救いはあるような気がした。しばらくすれば優貴の機嫌も直るだろうし、なんとかなるかもしれないと池田は希望を感じた。しかし、その一方で、優貴が自分と別れたいと口にしたのは、太陽が述べたような理由ではないことが、池田にはなんとなくわかっていた。

たぶん、何か他に理由があるのだ。それも、救いような理由が。でも、そのことを口に出して言ってしまうと、それが現実のことになつてしまいそうで怖かったので、池田は敢えて自分の考えは口にしなかった。

「池ちゃんって、今の彼女と付き合ってから何年やったけ？」

池田が黙って自分の思考のなかに沈み込んでいると、ふと思いついたように泉谷が口を開いて言った。

「今年でもう三年目やな」

と、池田は少し考えてから答えた。

「そうなんや」

と、泉谷は池田の返事に頷くと、

「もしかして今の彼女が今までのなかで一番長く続いているんちゃう？」

と、笑顔でからかうように言った。何しろ、高校のときからの付き合いなので、お互いの恋愛事情についてはよく知っている。

「まあ、そうやなあ」

と、池田は曖昧に微笑んで頷いた。付き合いはじめたときは、まさかこれほど長く続くとは思っていなかった。

「もしかして結婚とかも考えたりしてんの？」

と、泉谷は洋服の胸ポケットからタバコの箱を取り出すと、池田の顔を見て、冷やかすように言った。

「まあな」

と、池田は微笑して頷いた。

「もうちょっと収入が上がって落ち着いたら、結婚してもいいかなって思ってたりはしたけどな。もう俺もいい歳やし」

「確かにな」

と、太陽は池田の発言に軽く笑って同意した。

「俺らのまわりのやつら最近みんな結婚してんもんな」

池田は太陽の科白に曖昧に微笑んで頷くと、

「でも、こんなことになってしまった以上、結婚はなさそうやけどな」

と、池田は付け足して言うてから自嘲気味に口元で弱く笑った。

つられるようにして泉谷も少し口元を綻ばせると、

「でも、まだわからへんて」

と、泉谷は励ますように言った。

「この前、彼女は考えさせて欲しいって言うてたんやろ？もうちょっと待ってみたら？そのうち機嫌もなおるかもしれへんで。ていうか、たぶんすねてるだけやと思うけどな」

泉谷は明るい口調でそう言うて、軽く笑った。

「そうやったらいいんやけどな」

と、池田は泉谷に誘われるようにして少し笑った。この前の優貴の表情を思い出すと、とても泉谷の言っている通りだとは思えなかったが、しかし、その一方で、泉谷の言っていることを信じたいと思う気持ちは強かった。

「だけど、俺たちもう二十八なんよな」

と、池田が黙っていると、泉谷が嘆くように言った。

「どうしたん？急に？」

と、池田が可笑しくなつて尋ねてみると、

「いや、なんか信じられへんなと思って。自分が二十八歳なんて」

と、泉谷は持っていたタバコにライターで火をつけて、苦笑する

ように口元を歪めて言った。

「そっやな」

と、池田は泉谷の科白に口元で弱く微笑んで頷いた。実際のところ、内面的な部分は二十歳の頃とそれほど変わっていないような気がした。年齢だけが前へ前へと一人歩きをしていつているような感覚がある。

「もう完全におっさんやな」

と、泉谷は軽く笑って言うと、タバコを一口吸った。

池田も泉谷に誘われるようにして笑いながら、

「いずちゃん高校のときとか、二十八歳の自分ってどうなってると思ってた？」

と、ふと思いついて尋ねてみた。

すると、泉谷はタバコの煙を口から吐き出すと、思案するように視線を斜めうえにあげた。そして、それからしばらくしてから、
「よくわからへんけど、とにかくすごくなってると思ってたな」

と、泉谷は首を傾げて笑って答えた。

「俺は高校んときは建築家になるのが夢やったし、だから、二十八歳の自分は世界的な建築家になれてると思ってたな」

と、泉谷は微笑しながら過去の自分の無邪気な妄想を告白した。

「俺も似たようなこと思ってたな」

と、池田は泉谷に科白に共感して少し笑った。

「池ちゃんは高校のとき、何になりたかったん？」

「俺はプロのギタリストやな」

池田は泉谷の問いに答えながら、恥ずかしくなった。池田は高校生くらいのときまでは本気でプロのギターストになれると信じていた。というより、あの頃は何にだってなれる気がしていた。特に根拠もなく、過剰なほどの自信があった。

「でも、最近は触ってもいいひんけどな」

と、池田は笑って続けた。池田がギターを辞めたのは大学三年のときだ。途中で自分の才能の不足に気がついてしまったのだ。最近ではギターに触ることすらしてない。ギターは完全に今では部屋のインテリアと化していた。

「でも、みんなそんなもんやよな」

泉谷は池田の言葉に、どこか諦めたにも似た微笑みを口元に張り付かせて少し小さな声で言った。

「みんなどこかでこんなものかって諦めたり、妥協したりしてるんだよな」

「確かにな」

と、池田は小さく笑って頷いた。

それから、池田はふと窓ガラスの向こうに見える外の景色に視線を向けてみた。外の世界は夜の暗闇に黒く塗りつぶされていて、その黒い世界に横断歩道の赤い光がぼんやりと浮かびあがっているのが見えた。

「人生ってなかなか上手いかへんもんやよな」

そう言って、太陽が静かに笑う声がどこか遠くに聞こえた。

第五話

確かに、人生はなかなか上手くいかない、池田は会社の窓の外に見える灰色の空を見つめながらため息をつくように思った。

でも、人生とはそんなものなのだろう。仕方のないことだ。それにもし仮に何もかもが思い通りになったとすら、きつと人間は成長しないだろう。これは誰かの受け売りだが、挫折があるからこそ、ひとは学ぶことができるのだ、と、池田は自分に言い聞かせた。

でも、それにしてもな、と、池田は一方で思う。上手く行くことよりも、上手くいかないことの方が、ちよつと多すぎるんじゃないのか、と。池田はいるかどうか分からない誰かに対して抗議しなくなった。もうちよつとなんとかありませんかね、と。

池田が今の会社に就職したのは二十六歳のときだ。それまではフリーターをしながら公務員を目指していた。でも、なかなか採用試験に受からず、途中で諦めていまの会社に就職した。

そうしたのは、このままいつまでも結果が出せないままに歳を取ってしまうのが怖かったからだ。歳を取れば取るほど就職先を見つけることが難しくなるだろうと思った。手遅れにならないうちにと思った。

そして現在の生活がある・・・だが、正直、それほど心躍る毎日ではない。べつにいまの仕事が嫌いなわけではないが、かといってこの仕事をずっと続けていきたいと思えるほど愛しているわけでもない。何よりもネックなのは拘束時間が異様に長くなったことだ。

入社した当初はそれほどでもなかったのだが、最近は朝の八時に出勤して、夜の九時十時まで残業するのが当たり前になっている。それで残業代はつかない。土日も満足に休みを取ることができない。こんな生活がこれからあと何十年も続くのかと思うと、池田は暗澹した気持ちになった。

いつそ今の会社を辞めようかと思わないでもないのだが、経済的な問題もあるのでなかなかそういうわけにもいかない。転職したとしても、どこの会社も条件は似たようなものだという気がする。

なんとかしなきゃな、と、池田は思う。もっとものをポジティブに捉えることができるようにならなければ。どちらかだ、と、池田は思う。もっと今の仕事を好きになって仕事に追われる毎日でも楽しいと思えるようになるか、もしくはべつの道を見つけるか。でも、具体的にどうすればいいのだろうか？

「おい、池田」

と、池田がそこまで考えたところで、突然、大きな声で名前を呼ばれた。声の聞こえた方向に視線を向けてみると、いつからそこに居たのか、主任の大島が自分のデスクの前に立っている。大島は池田よりもひとつ年下なのだが、池田よりも社歴が長いということもあってか、池田のことを呼び捨てにしていた。

「なにぼおつとしてんだよ」

と、主任は半笑いで言った。主任はもともと大阪出身の人間なのだが、大学で東京に行っていたとかで、何故か標準語でいつも喋った。

「すみません」

と、池田はとりあえず頭を下げた。ぼおつとしていたのは事実な

ので何も言えない。

「お前さ、今度土曜日どうせ暇だろ？」

と、主任は勝手に決め付けて言った。

いや、その日はちよつと予定があると池田は口を開きかけたのだが、主任はそれを無視して言葉を続けた。

「悪いんだけどさ、今度土曜日、俺の変わりにA社のメンテナン
ス行ってくない？ほんとうは俺の担当なんだけどさ、ちよつと用事
ができちゃったんだよ」

池田の勤めている会社は他の会社のネットワークの管理と保全を
行っている。

池田はこのところ休日出勤多くて今度の土曜日はゆっくり休みた
いと思っていた。そのことを池田が口にしようとすると、それを大
島は遮って、

「じゃあ、決まりな。しつかりやってこいよ」

と、主任は池田に手をあげて、もう用は済んだとばかりに池田に
背を向けて歩いていった。

池田はその主任の背中に向かって自分の椅子を投げつけたいよう
な衝動に駆られたが、どうにか我慢した。

池田の乗ったエレベーターは目的の一階に到着する前に五階で停
止した。

旧型のエレベーターのドアがゆっくりと開く。これではったり主任とかと鉢合わせになったら嫌だなと池田が思っていると、開いたエレベーターのドアの前に立っていたのは中島だった。中島はエレベーターに乗っている池田の姿を認めると、少し嬉しそうな笑顔を見せた。

中島は小走りでエレベーターのなかに乗り込んでくると、
「これから外回りですか？」
と、明るい声で尋ねてきた。

池田は中島の問いに頷いた。これからルート営業にいかなくてはならない。

「大変ですね」
と、中島は小さく笑って言った。

池田がこうして中島とふたりきりで口をきくのは、先週カフェで中島の話聞いていらいだった。

「中島さんは何階？」

池田は再びエレベーターのドアがゆっくりと閉まると、中島の目的の階数を確認した。

すると、中島はエレベーターのパネルに表示された階数に目を向けて、

「あ、わたしも同じです」

と、微笑して答えた。

「お昼取るの遅くなっちゃったんで、これからコンビニに行くところなんです」

と、中島は口元に浮かべた微笑をそのままにいいわけするように続けた。

少しの沈黙があつて、降下をはじめたエレベーターの微かな稼動音がその沈黙を満たした。

「わたし」

と、短い沈黙のあと、中島はやや躊躇ってから口を開いた。池田が中島の顔に視線を向けると、

「わたし、やっぱり会社辞めることにしました」

と、中島は心持顔を俯けるようにして少し早口に告げた。

「やっぱりやめるんや」

予期していたことではあつたが、池田は彼女がいなくなつてしまふのだと思うと、残念だった。

「あれから色々考えたんですけどね・・・でも、やっぱりなと思つて」

と、中島はどこか申し訳なさそうに小さな声で言った。

「まあ、働く場所はべつにここしかないわけじゃないしな」

と、池田はできるだけ優しい声で言った。

「そうですね」

と、中島は池田のかけた言葉に少し寂しそうな声で頷いた。そして何秒間の沈黙のあと、

「池田さんって、今度の土曜日とかって暇ですか？」

と、中島は唐突に尋ねてきた。

土曜日はさつき主任に突然おしつけられた仕事が一とつ入っていたが、夕方からなら時間はあるはずだった。そのことを池田が告げると、中島は微笑んで、

「あの、もし良かったらライブ来てくれませんか？」

と、提案してきた。

「ライブ？」

と、池田が少し怪訝に思って尋ねみると、中島は恥ずかしそうに小さく笑って、

「ライブっていつでもべつにわたしがライブするわけじゃなくて、わたしの彼氏がバンドやってて、それでライブやるみたいなんですけど、もし良かったらどうかなって思ってた」

と、中島は遠慮がちな声で誘った。

池田は中島が友達料金にしてくれるというので、そのライブに行くことを承諾した。

そのうちにふたりの乗ったエレベーターは一階に到着した。

エレベーターのドアが開くと、中島は、

「じゃあ詳しいことはまたあとでメールしますね」

と、微笑んで言った。そして中島は池田に向かって軽く頭を下げると、さきに歩いていった。

池田はエレベーターから降りると、さっき中島から手渡されたチケットに視線をぼんやりと落とした。

第六話

10

つまらない浮き沈みを繰り返しながら、いつも通りの毎日が過ぎていく。幸せのような、不幸せのような日々。

八月が終わり、九月がはじまった。夏が目映いばかりの太陽は少しずつその輝きを失っていき、その代わりに秋の到来を思わせる涼しい風が町に吹き渡るようになった。

セミたちが最後の力を振り絞るように大きな声で鳴いている。

池田は先週の土曜日に優貴にメールを送って以来、ずっと連絡を取るのを我慢していたが、（結局、池田が以前送ったメールに対して優貴からの返事はなかった）金曜日の夜、どうしても不安な気持ちに耐えられなくなって電話をかけてしまった。

たとえ望ましい結果が得られなかったとしても、池田は優貴の声が聴きたかった。このまま別れることになるとしても、こんなふうに曖昧なまま終わってしまうのが嫌だった。

最後に優貴が電話をかけてきた日の着信履歴を呼び出し、優貴に電話をかける。ついこの前まで毎日のように電話をかけていたのに、その日ははじめて電話をかけるときのようにひどく緊張した。

一回目の呼び出し音がなり、二回目の呼び出し音になる・・・そして十回目の呼び出し音が鳴ったところで、池田は諦めて電話を切った。

優貴は電話に出なかった。

もしかしたら、優貴はいま忙しいのかもしれないが、でも、なんとなくそうではないような気がした。部屋に居て、ケータイのディスプレイに表示された池田の名前を見つめたまま、電話が切れるのをじっと待っている彼女の姿が目には浮かぶような気がした。

そんな彼女の姿を想像すると、池田は傷ついた、寂しい気持ちになった。

1
1

土曜日、池田は主任に頼まれた仕事を片付けると、その足でそのまま心斎橋に向かった。心斎橋で中島が言っていたライブがあるからだ。

ライブには泉谷も一緒に誘った。泉谷を誘ったのは、ひとりで行くのが心細かったからだ。泉谷も大学生の頃、池田と同じようにバンドをやっていたことがあるので、もしかしたら興味があるかもしれないと思ったのだ。

池田が誘うと、泉谷はその日は特に何も用事なかったようで、ふたつ返事で一緒にライブに行くことを承諾してくれた。

泉谷とは心斎橋の駅前で待ち合わせをして合流した。

泉谷は池田がスーツ姿なのを見ると、

「なんでスーツなん？」

と、少し可笑しそうに笑って訊いてきた。

「いや、今日さっきまで仕事しとってん」

と、池田が笑って弁解すると、泉谷は、

「大変そうやな」

と、笑って同情するように言った。

中島が言っていたライブハウスは駅から少し離れた地下にあった。受付でチケットを買い、ライブハウスに入る。

ライブハウスは百人入るのがやっとというくらいの小さな会場だった。薄暗いライブハウスでは演奏前らしい数人のバンドマンたちがそれぞれの楽器のチューニングをしている。池田はそんな彼等の姿を見つめながら微笑ましい気持ちになった。自分も何年か前ではこんな小さな会場で演奏をしていたことがあったな、と、懐かしくなつた。

チケットにはソフトドリンクの券がついているので、池田が係りの女の子にチケットを渡して、紙コップにコーラを注いでもらっていると、

「池田さん」

と、背後から声をかけられた。

池田がふと後ろを振り返ってみると、そこには中島が笑顔で立っていた。

「ほんとに来てくれたんですね」

と、中島は嬉しそうな笑みを浮かべて言った。

「うん。中島さんの彼氏がどんな演奏するのか見てみたかったしな」と、池田は曖昧に微笑んで答えた。

それから、池田は自分のとなりでどこか居心地悪そうな笑みを浮かべている友人のことを、中島に紹介してやった。すると、中島は、「中島です。会社ではいつも池田さんにお世話になってます」

と、丁寧^に頭を下^げた。

「こんなやつにそんな頭さげでもいいで」

と、池田が笑って言う^と、

「こんなやつってなんやねん」

と、池田のとなりで泉谷は笑って言った。それから、泉谷は中島に改めて視線を向けると、

「どうも泉谷です。よろしく」

と、少し恥ずかしそうに笑って言った。

「中島さんの彼氏は楽器はなにやってんの？」

と、池田はさっきいれてもらったばかりのコーラを口元に運びながら、ふと気になって尋ねてみた。すると、中島はちらりとステージの方に視線を向けて、それからまた池田の顔に視線を戻しながら、「一応ギターボーカルです。あの背の高いひとがそうなんですけど」と、心持ち照れ臭^{そう}な口調で説明した。

池田は中島の説明を受けて、ステージでギターの調弦をしている、すらりと背の高くて、髪^の長い男に目を向けた。目つきが少し鋭^が、でも、整った顔立ちをしている。中島はこんなひとを好きになるんだ、と、池田は何故か意味もなく嫉妬^の混じった喪失感を抱いた。

「だけど、池田さんたちが間に合^{って}て良かったです」

と、中島は微笑^{んで}言った。

「わたしが池田さん誘ったときって、彼氏のバンドが何番目にやるかとまだ決ま^{って}てなかったから、池田さんたちが間に合^つかどうかちょっと心配^だったんですよ」

池田のときもそうだったが、大抵のアマチュアバンドのライブは、何組かのバンドが集まってそれぞれ順番に演奏する。その方がスタジオ代などが安くなるし、アマチュアバンド一組では集客力に欠けるからだ。

と、そのとき、奥の方から「まゆー！」と、彼女の名前を呼ぶ声が聞こえた。見てみると、ステージの前方に中島と同年齢くらいの女の子たちが何人か集まっている。中島は中島で友達と一緒に来ているのだろう。

「あ、すみません」

と、中島は微笑して言うと、池田たちに軽く会釈をして、名前を読んでいる友達のもとへと歩いていった。

そして中島が友達のもとへ歩いていくのとはほぼ同時に、スタジオの照明の照明が落ちて、演奏がはじまった。

12

中島の彼氏たちのバンドの演奏は、池田が想像していたよりもずっとレベルが高かった。普通にプロとして通用しそうな気さえする。少なくとも日本のヒットチャートを賑わせている一部の即席のミュージシャンよりはずっとレベルが高いように池田には思えた。どうして彼らが未だにこんな小さな会場で演奏しているのか池田には不思議だった。

ライブが終わると、池田と泉谷は駅近くにある居酒屋に入った。夕食がてらに飲んでいこうという話になったのだ。

池田と泉谷はとりあえずという感じでビールを注文した。それと一緒につまみをいくつか適当に注文する。

「でも、なかなか良かったよな」

と、池田は注文したビールが運ばれてくると、さつき見てきたばかりのライブの感想を述べた。

「そうやな」

と、泉谷は池田の感想に微笑して同意した。

「池ちゃんからアマチャアって聞いたとったからや、あんま期待してへんかったんやけど、普通に良かったな。あれやったらCDで売っててもおかしくないって」

泉谷は口元に浮かべた微笑をそのままに続けると、テーブルのうえのビールを手にとって少し飲んだ。

「ほんまやな」

と、池田は頷きながら、泉谷に続いてビールを飲んだ。

「なんであれだけレベルが高い曲が作れてんのに、未だにデビューできないんやろうな」

と、池田は手にしていたビールを机の上に戻しながら思ったことを口に出した。

池田はさつき聞いたばかりの曲を思い出した。中島の彼氏のバンドが演奏した曲は、静と動が入り混じったような雰囲気曲だった。激しいのに静かで、怒りに満ちているようで、優しいようでもある。

「でも、まあ、仕方ないちゃう？」

と、泉谷は池田の言葉に軽く笑って答えた。

「必ずしもいいものが売れるわけじゃないからな」

「まあ、そうなんやけどな」

と、池田は弱く頷いた。それから、二口目のビールを口元に運ぶ。確かに泉谷の言うとおりだった。いま自分が思っているようにことを感じているひとは世の中にはきつとたくさんいるのだろう。結局、仕方のないことなのだ。誰にもどうすることもできない。でも、そうとわかっていても、池田はどこか納得できなかった。

「結局、全ては運なんよな」

と、池田が小さな声で嘆くように言っていると、泉谷は、

「まあ、でも、運も含めて実力やからな」

と、言い含めるように軽く笑って答えた。

「でも、ほんとうにいいものが埋もれていってしまうのってもない？」

と、池田は食い下がった。すると、泉谷は、

「そうやな」

と、考え込むように頷いてから、

「でも、ほんとうにいいものやったら、自然と世の中にでていくって」

と、しばらくしてから、なんでもなさそうに笑って言った。

池田は果たしてほんとうにそうだろうかと思っただが、口に出しては何も言わなかった。それから、池田は東京で小説を書いている友達のことを少し、考えた。

「それに、まだ中島さんの彼氏がデビューできないって決まったわけじゃないやん」

と、泉谷は運ばれてきたばかりのつまみを口元に運びながら、池田をなぐさめるでもなく微笑んできた。

「まあ、そうなんやけどな」

と、池田は口元で弱く笑ってから、泉谷と同じようにつまみを口に運んだ。

1
3

第七話

13

月曜日、池田は会社の廊下で中島とすれ違いかけたときに、この前のライブの感想を中島に伝えた。ライブの演奏が自分が想像していたよりもずっと良かったこと。プロとしても十分通用するだろうと本気で感じたこと。

池田がそう感想を述べると、中島は、
「ありがとうございます。今度彼氏にあつたら池田さんがそう言うてたって伝えておきますね」

と、嬉しそうな笑顔で言った。

「彼氏、たぶんめっちゃ喜びますよ」

と、中島は楽しそうに続けた。

「でも、もったいないよな」

と、池田はこの前も泉谷と居酒屋で話したことを口に出した。

「なんであれだけいい演奏ができてんのに、まだデビューできないんやろな？日本の音楽シーンとか、これってどうなん？って思う曲とか一杯あんのにな」

「そうですね」

と、中島は池田の意見にちょっと困ったように曖昧に笑って頷いた。

それから、中島は数秒間、感覚をあけてから、
「でも、わたしも池田さんと似たようなことはよく思うんですね」

と、続けて話した。

「これはたぶん」

と、中島は少し躊躇ってから続けた。

「自分の彼氏だからっていう鼻屑目もあるんだと思うんですけど、でも、わたしは彼氏の作る音楽がめちゃくちゃ良いと思って、それなのになんでなかなか認められないんだろってときどき思うことがありますね」

中島はそこまで話すと、池田の顔を見て、自分の話した言葉が深刻身を帯びてしまうのを恐れるように口元で少し笑った。

「中島さんの彼氏さんはまだデビューするのは難しそうなん？」

と、池田は気になって尋ねてみた。すると、中島は、

「大阪では結構知ってくれるひともいて、なかには熱心なファンとかもいるみたいなんですけどね・・・でも、なかなか難しいみたいです」

と、考え込むような表情で答えた。

「そうなんや」

と、池田はかける言葉が思いつかなくてただ頷いた。

「・・・彼氏、いまちよつと迷ってるみたいなんですよね」

と、中島は少し間をあけてから、いくらか小さな声で言った。

「迷ってるって？」

と、池田が気になって尋ねてみると、中島は、

「わたしの彼氏、いまフリーターしながら音楽やってるんですけど、でも、今年で二十七歳で、だから、このまま音楽続けていくかどうか・・・やっぱり将来のこととかもあるし、親も色々うるさいみたいで」

と、心持顔を俯けるようにして、少し小さな口調で告げた。

「そっか。色々難しいよな」

と、池田は同情して言った。もし自分が中島の彼氏だったら、やはり同じように悩んだだろうと池田は感じた。

と、そのとき、向こうの廊下から誰かが歩いてくるのが視界に入った。誰だろうと思って見てみると、それは主任の大島だった。主任は池田と中島の姿に気がつく、ふたりがいるところまで歩いてきて、

「おい、池田、お前、何セクハラやってんだよ？」

と、半笑いで、冗談とも本気ともつかない口調で池田に声をかけた。きた。

池田が主任の突然の意味不明な問いかけに上手くリアクションできずにいると、

「中島さん、気をつけろよ。こいつエロイことしか考えてねえんだから」

と、主任は中島に笑いかけて言った。

中島は主任の言葉に困ったように口元で曖昧に微笑んだ。

「もしこいつになにかされたら、いつでも俺に相談するんだよ」

と、主任は妙に優しい口調で中島に声をかけた。それから、主任は池田たちに背を向けて歩いていうことしたが、突然何か思い出したのか、立ち止まると、後ろを振り返って、

「池田、そういえば、お前がさっき提出した報告書、あれ全然駄目ね。今日中に書き直して提出」

と、告げた。

その報告書というのは、この前池田が主任におしつけられた仕事の報告書で、本来であれば池田の仕事ではなく、主任の仕事のはずだった。報告書に不満があるのなら、最初から主任が自分でやればいいのだ。池田が不満に思っ黙っている、
「わかってんの？」

と、主任は脅すように語気を強めて言った。

池田はいちいち口答えするのも面倒だったので、わかりました、と答えた。それで主任はやっと満足したようで、後ろ手だと軽く手を振ると、オフィスがある方に向かって歩いていった。

「・・・あのひと、ほんとに嫌い」

と、主任の姿がやっと思えなくなると、中島が小さな声でそう言うのが聞こえた。

14

武田洋介が電話をかけてきたのは、金曜日の夜だった。

池田はその日仕事を終えると、自分のアパートに戻り、とりあえずという感じでシャワーを浴びた。今週は珍しく休日出勤の予定もなく、ゆっくり休暇を過ごすことができそうだった。

相変わらず優貴からの連絡はないままだったし、特にやりたいことも、用事もなかったが、しかし、これから少なくとも二日間仕事（特に主任）のことを考えずにすむのだと思うと、池田はほっとくつろいだ気持ちになれた。

さっぱりした気分で風呂から上がり、喉が渴いたので、ビールで

も飲もうかと冷蔵庫を開ける。そしてそのときに、池田は机の上においてあったケータイのランプが点滅しているのにふと気がついた。自分が風呂に入っているあいだに、誰かから連絡があったのだ。

もしかしたら優貴から電話があったのかもしれないと思い、池田の動悸は早くなった。開けかけていた冷蔵庫の扉を再び閉め、テーブルのところまで歩いていく。そしておもむろにケータイを手に取り、着信履歴を確認する。すると、そこにはあったのは、優貴の名前ではなく、大学時代の友達の名前だった。

彼の名前は武田洋介で、彼は大学を卒業したあと、東京にでて、アルバイトをしながら小説家を目指している。

期待していた優貴からの連絡ではなかったので少しがっかりもしたが、しかし、池田は着信履歴に武田洋介の名前を見つけたとたん、懐かしい気持ちになった。彼とはもう三ヶ月ちかく連絡を取っていない。そのうちに連絡を取らなきゃなと思いつつ、つい日々の雑事に追われているうちに連絡を取るのを忘れてしまっていたのだ。

池田は慌てて友達に電話をかけなおそうとした。そして池田がリダイヤルのボタンを押そうとしたまさにその瞬間に、ケータイの着信音が鳴った。画面に表示されている名前は池田が電話をかけなおさそうとした本人からだった。

「もしもし」

と、池田は電話の通話ボタンを押すと言った。すると、
「もしもし」

と、耳元に懐かしい友人の声が広がった。
「池ちゃん？武田だけど、わかる？」

「久しぶりやな」

と、池田は軽く笑って答えた。

「久しぶり」

と、電話の向こう側で友人の声が嬉しそうに弾んだ。

「メールはちよくちよくしてたけど、こうやって電話で話すのはほんとうに久しぶりだね」

「そうやな」

と、池田は微笑して同意した。

「どうしたん？」

わずかな沈黙のあと、池田は用件を尋ねてみた。

「いや、実は友達の結婚式がそっちであってね」

と、武田は答えた。

「だから、明日そっちに行くんだよ。それで、そのあとちょっと会えないかって思ってた。急で悪いんだけど」

武田は少し申し訳なさそうな口調で付け足して言った。

「それやったら全然大丈夫やで」

と、池田は笑って答えた。

「どうせ明日は何も用事がなくて暇しとってん」

「ほんと？それなら良かった」

「予定はどうなってるの？」

と、池田は確認してみた。

「一応、三時くらいに式が終わる予定で、だから、五時くらいに梅田とかで待ち合わせでどうかな？」

「わかった」

と、池田は武田の提案に頷いた。

「でも、二次回とかは行かんでいいの？」

と、池田がふと気になつて尋ねてみると、

「ほんとうは二次回も誘われてるんだけどね、でも、池ちゃんに会えるのは明日くらいしかないから」

と、武田は微かに笑つて弁解するように答えた。

「そうなんや」

と、池田は何と言つたらいいのかわからなくてとりあえず相槌を打った。

「じゃあ、明日、楽しみしてるよ」

と、そう言つて電話を切った友人の声は、気のせいか、寂しそうにも聞こえた。

第八話

15

武田とは梅田の駅前で待ち合わせをして合流した。

それから町を少し歩いて、雰囲気の良いさそうなパスタ屋に入った。

店は、夕食にはまだ早い時間帯ということもあって、土曜日にし
ては比較的空いていた。

池田と武田は店員に奥のテーブル席に通されて、向かい合わせに
腰かけた。

程なくして注文を取りに来た店員に、池田も武田もカルボナーラ
スパゲティのセットを注文
した。

「だけど、ほんまに久しぶりやな」

と、池田は注文を取った店員が厨房に戻っていくと、微笑んで言
った。彼にこうして会ったのは先輩の結婚式以来なので、かれこれ
三年振りくらいということになるのだろうか。

「そうだね」

と、武田も微笑んで答えた。

「今日はこれからどうすんの？」

と、池田はふと気になって尋ねてみた。

「もし泊まるところが決まっていなかったら、俺ん家に泊まってくれてもいいけどな」

「ありがとう。でも、大丈夫だよ」

と、武田は池田の申し出に申し訳なさそうに微笑んで言った。

「友達がホテルとってくれてるんや」

と、池田が納得すると、武田は、

「いや、そうじゃなくて。今日はこのあとすぐ夜行バスで帰るつもりなんだ」

と、武田は苦笑するように軽く笑って答えた。

「今日来たばかりなのにすぐ帰るなんて大変やな」

と、池田は想像しただけで憂鬱な気持ちになった。

「明日、バイト先がどうしてもひとが足りなくてね、仕方なんいだ」

と、武田は困ったように笑って答えた。

「そっか。大変やな」

と、池田は曖昧に微笑んで頷いた。それから、テーブルのうえのお冷を手にとった少し口に含む。武田も池田につられるようにしてお冷の入ったコップを口元に運んだ。

「小説は書いてんの？」

と、池田は手にしていたコップを机のうえに戻すと、なんとなく尋ねてみた。すると、武田は軽く眼差しを伏せるようにして、

「一応ね。書いてることは書いてるよ」

と、恥ずかしそうに口元で小さく笑って答えた。

「早くデビューできるといいな」

と、池田は励ますように言った。

「そっだね」

と、武田は頷いたが、どこかその表情は浮かなかった。

間もなくすると、池田と武田が注文した料理は運ばれてきた。ふたりはその料理を食べながら、思いつくままに話をした。お互いの共通の友人のこと。最近観た映画の感想。天気の話。お互いが覚えているようで覚えていないような思い出話。何しろ久しぶりなので話題が尽きることはなかった。

そのうちに店が混み合ってきたので、ふたりは勘定をすませると、店を出た。

店を出ると、外には、夏の終わりを思わせる涼しい風が吹いていた。空気には微かに秋の匂いがまざりはじめている。風に吹かれて街路樹の木々の葉が揺れて、池田はそんな木々のざわめきを聞いているうちに、ふと、懐かしいような、寂しいような、よくわからない気持ちになった。

辺りはすっかり日が暮れて暗くなり、ネオンの光が大阪の町を温かく彩っていた。土曜日の夜ということもあって、町を行きかうひとびとの顔はどこかみな華やいに見える。

武田の乗る予定のバスの時刻は、夜の十時半で、まだそれまでには時間があったので、ふたりは駅近くまで戻ると、その付近にあったセルフサービスのカフェに入った。店に入ると、池田はアイスのカフェラテを買い、武田はブレンドコーヒーを買った。

店は休日の夜ということもあって混雑していたが、ふたりはなんとか席を見つけて腰を降ろした。

「やっぱ混んでなあ」

と、池田はカフェの混み具合いさかうつんざりしながら言った。
こんなに込み合っていたのでは、なかなか落ち着いて話をする事が
できない。

「みんな考えることは同じだからね」

武田は池田の科白に軽く笑って答えた。それから、武田はさつき
買ったばかりのコーヒーを一口啜ると、

「池ちゃん最近仕事はどう？」

と、ふと思いついたように尋ねてきた。

「ほあ、ぼちぼちなあ」

と、池田は武田の問いにかけに、苦笑するように笑って答えた。

「やりがいとかがないわけじゃないけど、でも、そんな楽しいとか
じゃないよな」

池田は口元に浮かべた笑みをそのままに正直な実感を述べた。

「正直、生活のために働いてるって感じなんかな。・・・人間関係
とか色々あるしな・・・でも、まあ、結局、働くってそういうことな
んかしらんけど」

「そっか」

と、武田は池田の答えに、どう返事をしたらいいのかわからない
様子で、曖昧に微笑んで頷いた。

「俺も、武田みたいになんかやりことがあつたらいいんやけどな」

と、池田は武田の顔を見て、自嘲気味に弱く笑った。

「どうだろうね」

と、武田は池田の科白を肯定するでもなく、ただ口元で小さく笑
った。

わずかな沈黙があつて、その沈黙なかに、周囲の客の話声や、店
内に抑えたボリュームで流れている古いジャズの音楽が聞こえた。

今流れている音楽は、静かで優しい感じのするしつとりした音楽だった。

たとえばもつと秋が深まって、肌寒くなってきた頃に、微かに黄金色の色素を含んだ透明な日の光が、葉を落としてはじめた木々の枝々をそつと照らしているような。親密で、穏やかで、それでいてどこか物悲しい印象を受ける。

そういえば、この音楽はどこかで聴いたことがあるな、と、池田はふいに思い出した。一体どこで聞いたのだろう。しばらく考えているうちに、池田はやがて思い出した。

あれは確か大学生のときだ。大学生のときに付き合っていた女の子が、池田の誕生日にジャズのCDをプレゼントしてくれたことがあった。そのCDのなかに、いま流れている音楽が確か入っていたのだ。

池田はどうして自分はその子と別れてしまったのだろうかと後悔した。その子は結構真剣に自分のことを好きでいてくれたのに。

「・・・実はさ」

と、池田が流れている音楽に耳を傾けながら、過去の記憶に思いを巡らせていると、それまで黙っていた武田がいくらか言いづらそうに口を開いた。

池田が顔をあげて、友人の顔を見つめると、武田は逃げるようにそれとなく眼差しを逸らした。そして躊躇うようにわずかに間をあけから、

「実は今度、俺、実家に帰ろうかと思ってるんだ」

と、武田は告げた。そして、武田はそう言ってしまうてから、どん

な表情を浮かべたらいいのかわからないといったように、いくらかぎこちなく口元を笑みの形に変えた。

「実家に帰る？」

と、池田は意味がよく飲み込めなくて友人が口にした言葉を小さな声で反芻した。武田の実家があるのは宮崎だ。池田はずっと昔に武田とはじめて会ったときに、お互いに緊張しながら自己紹介を交わしている場面を思い起こした。そのとき彼は宮崎出身で、大阪には大学進学ででてきたと話していた。

「俺の実家って、自営業やってるんだけど、だから帰って、その手伝いをするのも悪くないかなって最近思ってた」

武田は口元に笑みを湛えたままいいわけするように続けた。

「俺もいい加減いい歳だしね・・・いつまでもアルバイトで生活しているわけにもいかないし、そろそろ区切りをつけないと思って」

武田はそう言ってから、弱く笑った。

「じゃあ、もう小説は書かへんの？」

と、池田が気になって尋ねてみると、武田は黙って頷いた。

「そっか」

池田はただ頷いた。どう言ったらいいのかわからなかった。また少しの沈黙があつて、その沈黙のなかに周囲の喧騒がそつと溢れた。

「・・・大学を卒業してからこれまでやってみて」

武田はしばらくの沈黙のあとで口を開くと、ゆっくりとした口調で言った。

「やっとわかったよ。自分には才能なんてなかったんだって」

武田はそう言ってから、寂しそうに少し笑った。

「でも、まだわからへんちゃうん？」

池田は友人の顔を見つめて言った。

「実家に帰るのはいいとしても、べつに小説家になるのは諦めんでもいいちゃう？好きだったら、趣味でも続けばいいんじゃない？」

池田の言葉に、武田は微かに首を振った。そして、

「中途半端に続けたら、未練が残りそうな気がするんだ」

と、口元で弱く微笑んだ。

「そっか」

と、池田は頷いた。確かに、このままいつまでもアルバイトで生活していくのは大変だろうし、将来のことや、生活のことを考えると、武田の選択は正しいのかもしれない。また中途半端に小説を書き続けると、未練が残りそうな気がするという武田の言葉も理解できなくなかった。ただ、そうとわかっていながら、池田は残念な気がした。

池田はどこかで武田の夢を追う生き方に自分を重ねていたようなところがあった。だから、武田が夢を追うことを諦めたということは、そのまま自分の夢が叶わなかったような喪失感を、池田にもたらした。

池田はふと色んなものが失われていくな、と感じた。若さや、夢や、希望といったもの。ポケットの底にほんのわずかに残っていたものまで消えていってしまう。

「また宮崎にも遊びにきてよ」

と、武田はいくらか深刻になってしまった雰囲気を取り繕うように無理に明るい口調を装って言った。

「宮崎に帰っちゃたらなかなか会えなくなると思うけど、年賀状くらいは出すと思うし」

「そっやな」

と、池田は武田の言葉に弱く微笑んで頷いた。

そのうちにバスの時間がやってきて、ふたりはカフェを出ると、バス乗り場までの短い距離を一緒に歩いた。あまり会話は弾まず、沈黙のあいだにぼつんぼつんと言葉をおいていく感じだった。もう夏も終わりだねという話を少し。空には明るい月が浮かんでいた。

最後、バスのなかからカーテンをあけて、自分に向かって手を振った友人の顔が、池田のいま見えている視界に重なるように残っていつまでも消えなかった。

第九話

16

九月も半ばを過ぎた頃から秋はその存在を急速に際立たせていき、まだ微かに残っていた夏の余韻のようなものを遠くへ押しやっていった。気のせいか色んなものの色素が薄れていくような気がした。町を照らす日の光。空の色。木々の葉の色。空き地に茂る草の色。

結局いつまで経っても優貴からの連絡はないままだったが、しかし、次第に池田のほうでも優貴のことを思い出すことは少なくなっていた。池田が優貴に連絡を取ることを試みたのは、二週間前の土曜日が最後だった。それからは一度も電話もメールもしていなかった。

二度も連絡を取ることを試みて、それで駄目だったのだから、結局のところ、もうどうしようもないのだろうと池田は判断した。優貴を失ってしまうのは哀しかったが、しかし、池田にもプライドがあった。無理をして、ストーカーと勘違いされるようなことまではしたくなかった。

中島はこの前エレベーターのなかでも告げたように、会社に辞表を出したようだった。退社までには手続きなどがあってももう少し時間がかかるようだったが、それでも十月のはじめ頃までには退社してしまうという話だった。

主任のこともあるので、中島が会社を辞めてしまうのは仕方ないことだったが、しかし、池田は中島がもうすぐ会社からいなくなってしまうのだと思うと、寂しい気持ちになった。考えてみれば、会社のなかで、音楽のことや、趣味のことについて話ができるのは彼女くらいのもだったのだ。他の人間とはそれほど話がかみ合わなかった。

池田はふと会社のなかから自分の居場所がどんどん失われていってしまうような、疎外感の混じった、孤独感を覚えた。そんなふうに感じてしまうのは、この前の武田の話のせいもあるのかもしれないかった。

池田はときどき、いま自分がどこに居て、どこに向かって進もうとしているのか、上手把握できなくなってしまうことがあった。一体何が楽しくて、何のために生きているのか。ただ生活するために働く、淡々とした毎日だけがあるような気がした。そう考えると、池田の気持ちはひどくふさぎこむことになった。まるで出口ない、細長い廊下に迷いこんでしまったみたい。

十月に入ると、何日が続けて激しい雨が降った。その雨が上がったしまうと、世界はいよいよ秋めいていった。大地を照らす日の光は透明度を増し、空気は澄んで、肌寒く感じられるようになっていった。木々の葉も少しずつ色づきはじめ、道端にはところどころで

木々の枯れ葉が目つくようになった。

中島の送別会が催されたのは、中島が会社で働く最終日だった。予定があつて出席できない人間も何人かいたが、池田の働く部署のほとんど全てのひとが参加することになった。

仕事が終わつたあと、近くの居酒屋に移動して、中島が去つてしまつことをみんなで惜しんだ。

そのとき池田はたまたま中島の近くの席になつて、彼女と楽しく話しをしていたのだが、しばらくすると、酒を飲んで顔が赤くなつた主任がふらふらと池田と中島が話している席に割り込んできた。

「中島ちゃん、どうして辞めちゃうんだよ」

と、主任は中島のグラスに無理にビールを注ぎながら妙におどけた口調で言つた。

中島が主任の言葉に困つて曖昧に微笑んでいると、主任は池田の顔に視線を向けて、

「中島ちゃんが辞めるくらいなら、こいつが辞めりゃあいなんだよ」と、主任は笑つて言つた。

池田は主任の科白に多少腹が立ちもしたが、酔っているし、きつと冗談で言っているのだろつと思つて、そうですね、と、曖昧に笑つて話を合わせておいた。

「こいつなんて全然仕事できねえし、中島ちゃんの方が会社に居てくれた方が会社のためになるんだよ。な、中島ちゃんもそう思うだろ?」

「そんなことないですよ」

と、中島は主任の言葉にぎこちなく笑って答えた。

「池田さん仕事頑張ってるし、後輩の面倒見とかもいいし」

「そんなことねえて」

と、主任は笑って中島の科白を否定した。

「こいつが優しいのは、エロイこと考えてるからなんだって。そう
だろ？池田？」

池田がどうリアクションしたらいいのかわからずにいると、

「な、こいつ否定しねえだろ？」

と、主任は笑って勝ち誇ったように言った。

「だいたいこいつの目からしていやらしいんだよ」

と、主任は微笑して続けた。それから、主任は中島の方に向き直ると、

「それにしても中島ちゃんって胸デカイよね？」

と、主任は中島の胸のあたりをまじまじと見つめて言った。

「ちよつと一回でいいからさわらせてよ」

中島が困惑していると、主任は構わずに中島の胸に手を伸ばした。

「ちよつとやめてください」

中島は小さな声で抗議したが、主任は笑って「最後にもう一回だけ」と言っ
て、また手を伸ばして中島の胸に触れようとした。

「主任、それセクハラですよ」

と、池田はもう一度主任が中島の胸に触れようとしたところで声

をあげた。しかし、主任は池田の声が聞こえなかったのか、そのまま手を伸ばそうとする。

「ちょっと主任」

と、池田は今度は少し大きな声で注意した。それから、中島の胸に手を伸ばしかけた主任の手を軽く叩く。

主任はまさか池田に手を叩かれるとは思っていなかったらしく、それまで浮かべていた笑みを消して、池田の顔をじっと見た。

「なんだよ、池田」

と、主任は池田の顔を見つめまゝ、脅すような口調で言った。主任は池田に注意されたことが気に食わなかったようだった。

「なにがセクハラだよ。お前、中島の彼氏じゃねえだろ？」

「そういう問題じゃないでしょう」

と、池田は答えた。

「中島さんが嫌がってるのがわからないんですか？」

「そんなかつこつけんなって」

と、主任はバカにしたように小さく笑って言った。

「中島さんの前でいいところ見せようたって無駄だって。中島さんはお前のことなんて絶対好きならねえし。誰かお前みたいなやつ」

池田は主任の言い草に腹が立った。我慢しようと思ったのだのだが、今回はできそうになかった。気がつくと言い返してしまつて

いる自分がいた。

「誰もそんなこと言ってないでしょう。だいたい誰のせいで中島さんが会社辞めると思ってるんですか？あんたのセクハラのせいですよ」

ちよつと池田さん、と、中島が小さな声で注意する声が聞こえたが、そのときは池田も頭に血が上っていて、自分の感情が抑えられなくなっていた。

「お前、誰に向かって口きいてんだよ」

と、主任も池田の言葉に声をあげた。

「あんたって、あんたですよ。他に誰がいるんですか？」

本格的に雰囲気が緊迫したところで、

「主任！ちよつとこつちに来てくださいよ」

と、よく事情を知らない男の社員が主任に声をかけてきた。

主任は一度その社員の方を振り向くと、それからまた池田の方に向き直って、池田の顔を睨みつけた。そして立ち上がると、何も言わずに、主任は声をかけてきた男の社員のもとへと歩いていった。

池田は去っていく主任の後ろ姿を無言で見送った。

第十話

18

それから、主任とは飲み会が終わるまで一言も口を聞かずに終わった。

飲み会が終わると、池田は中島と帰る方向が同じだったので、途中で一緒に帰ることにした。

他の社員と別れて、少し歩いたところで、
「すみません。わたしのせいであんなことになっちゃって・・・」
と、中島は心持顔を俯けて申し訳なさそうな口調で言った。

「そんな気にせんでもいいで」
と、池田は軽く笑って答えた。
「べつに中島さんが悪いわけやないんやし。だいたいあいつには前々からムカツいってん」
「でも、あんなこと言っちゃたら、会社で働き辛くなりませんか？」
と、中島は俯けていた顔をあげて池田の顔を見ると、心配そうな声で言った。

「大丈夫やって」
と、池田は微笑して答えた。
「いざとなったら、会社辞めればいいだけの話やし。実際、最近転職しようかなって思ってたん」
「・・・そうなんですか？」

中島はどこか気遣わしげな表情で池田の顔を見た。

「それより、中島さんはこのあとどうするか決めてんの？会社辞めてから？」

池田は明るい表情を装って、殊更に話題を変えて言った。

中島はさっきの主任との件について、まだ何か言い足そうな表情を浮かべていたが、もう一度迷うように池田の顔を一瞥してから、

「一応決めてます。東京に行こうかなって」

と、口元で弱く微笑んで答えた。

「東京に行くんや？」

と、池田は少し驚いて言った。

「実は最近、彼氏が東京に行くって言い出して」

と、中島は池田のリアクションに曖昧に笑っていいわけするように続けた。

「わたしの彼氏、この前も話したと思うけど、もう二十七歳で、だから、もう一度最後に東京で頑張ってみようかなって言い出して、それでわたしもついていこうかなって」

「そうなんや」

と、池田は頷いた。

「でも、そういうのもいいかもな。大阪よりも東京の方が色々チャンスもありそうやしな」

「でも、わたしも彼氏も東京で具体的にどうするかとかまだ何も決めてないんですけどね」

と、中島は池田の顔を横目で見ると、自嘲気味に付け足して言っ

た。

「結構アバウトやな」

と、池田は中島の笑顔につられるようにして少し笑った。

少し冷たい風が吹いて、近くの街路樹の葉を揺らした。オレンジ色の、温かみのある街灯の光が、ふたりが歩く通りを静かに照らし出している。そんな静かな、淡い光のなかいると、何故か色んなものが色あせて、物悲しく見えた。

「そつえば」

と、しばらくの沈黙のあとで、中島が微かに口元を綻ばせて言った。

池田が中島の顔に注意を戻すと、

「この前、彼氏に池田さんが褒めてった言ったら、彼氏、すごく喜んでましたよ」

と、中島は楽しそうな笑顔で言った。

「一度、池田さんに会ってみたいって言ってました。池田さんも昔音楽やってたことがあるんだって教えたら、話が合いそうって」

「俺の場合はただの趣味やけどな」

と、池田は軽く笑って答えた。

「そつだ、今度みんなで一緒にご飯食べませんか？」

と、中島は明るい声で勝手に話しを進めて言った。

「ほら、この前一緒にライブに来てた、なんでしたっけ？・・・いず、なんとかさん」

「もしかして泉谷のこと？」

「そうそう、泉谷さん。その泉谷さんとか誘って。わたし、もう会社辞めちゃったし、だから時間なら結構あるし、彼氏もバイトだから、時間合わせられると思うし。それでいつかふたりが都合のいい日にでも」

「べつにいいけどな」

なんだか妙な展開になってきたなと可笑しくなりながら池田は承諾した。

「やった！」

と、中島は嬉しそうにはしゃいだ声を出した。

「わたし、池田さんの友達と一度話してみたかったんですね。なんか面白そうなひとだったし。あのひと、名前忘れちゃったけど、お笑い芸人の誰かに似てますよね？」

池田がそのお笑い芸人の名前を告げると、中島はそのひとそのひとと言って、可笑しそうに笑った。

「でも、あいつは顔が似てるだけで、あんま面白くないで」

と、池田は中島に一応忠告しておいた。

「今日は月がきれいですね」

と、中島は唐突に歩みを止めると、夜空を見上げて言った。池田が中島につられるようにして夜空を見上げてみると、そこには、月が、冷たく澄んだ光をそっと放っていた。

予想していたことではあったが、主任の池田に対する風当たりは強くなっていた。以前からそういう傾向はあったのだが、この前の飲み会の席での一件以来、その傾向はますます顕著になっていた。ときには嫌がらせ以外の何物でもないと思えるようなことまでされるようになった。

池田が自分のデスクで仕事をしていると、主任の机の前まで呼び出されて、どうでもいいようなことで大声罵らせた。適正がないからやめろ、と、まで言われた。また面倒な仕事は全部池田に押し付けられたし、何かミスがあると池田のせいにされた。

池田の会社は一応週休二日制になっているのだが、休日は決まって主任に何か仕事を頼まれて休日出勤しなければならなかった。

何人かの同僚は池田に同情してくれたし、慰めの言葉もかけてくれたが、しかし、だからといって、池田の弁護までしてくれるわけではなかった。もし、主任に逆らえば、今度は自分が標的にされることがわかりきっているからだ。

主任のせいで池田はストレスがたまり、ときには気分が悪くなつて、胃液を吐くことがあるくらいだったが、しかし、ここで辞表を出したりしたら、それこそ主任の思うツボだと思って、どうにか我慢した。主任の嫌がらせなんかに負けてたまるか、と、池田は意地になっていた。

第十一話

20

日々は駆け足で過ぎて行き、十月も後半に入ると、秋の記しが色んなところで見られるようになっていった。木々の葉は美しい紅に色づき、通りには金木犀の甘酸っぱいような香りが漂うになった。

街を照らす日の光はますます透明度を増し、そんな淡い光のなかで、世界は少しずつその色素を失っていくようだった。心なしか、空の色まで、夏の頃に比べると、半透明の淡いブルーに変わった気がした。耳を澄ませば、今どっかりと腰を下ろしている秋の背後に、冬の、微かな足音が聞こえるような気さえした。

泉谷太陽から電話があつたのは、土曜日の夜だった。電話の内容は、ちよつと話したいことがあるので、もし日曜日暇だったら、一緒にご飯でも食べにいかないかというものだった。池田はどうにか日曜日は時間を作ることができそうだったので、夕方の六時に難波で待ち合わせをしようと言って、電話を切った。そういえば、中島が今度一緒に食事に行きたいと言っていたし、そのことを伝えるのにも機会だと池田は思った。

「池ちゃん、ちよつとやつれたんちゃう？」

待ち合わせ場所に現れた泉谷は、池田の顔を見ると、軽く笑って指摘した。

「いや、最近ちょっと仕事が忙しくてな、あんま食べてないねん」
池田は友人の指摘に、口元で少しぎこちなく笑って誤魔化すように答えた。おそらくやつれてしまったのは、ストレスのせいで食欲がこのところなかったせいだろうと池田は思ったが、しかし、そのことは黙っていることにした。ストレスのせいで食欲がなかったなんて格好が悪くて告げる気にならなかった。

池田が、この前の送別会の人に、中島が一度泉谷も交えて食事に行きたいと言っていたことを伝えると、泉谷は意外な展開に戸惑いながらも、基本的に土日であれば問題ないと中島の誘いを承諾してくれた。

それから、ふたりは通りをしばらく歩いて、最近できばかりのパンに入った。

店に入ると、ふたりはどちらもとりのあえずという感じでビールを注文した。

程なくして運ばれてきたビールとつまみを口にしながら、池田と泉谷はなんでもなような世間話をした。泉谷の明るい笑い声を聞いていると、池田はこのところふさぎこんでいた心が、少しだけ解きほぐされていくような気がした。

「でも、なんか今日、池ちゃん、元気ないよな？」

一通り話題が尽きたところで、泉谷が二杯目のビールを口元に運びながら言った。

「いや、べつにそんなこともないで」

と、池田は泉谷の言葉に、口元で弱く微笑んで否定した。

「・・・あれから、彼女とは上手くいつてんの？」

池田は泉谷の問いに首を振った。優貴とはもう一ヶ月半近く連絡を取っていなかった。最初の頃は優貴のことを思い出すと、辛い気持ちになることもあったが、最近は仕事が忙しいのと、主任のこのことで、優貴のことを思い出すことは少なくなっていた。

風呂に入っているときなどにふい思い出して、哀しい気持ちになることがないわけではなかったが、しかし、最近ではすっかり諦めの気持ちに変わっていた。もう、今更彼女の気持ちを繋ぎとめようとか、そういう気力は失われてしまっていた。

「実はあれから全然連絡とってないねん」

と、池田は苦笑するように笑って少し弱い声で答えた。

「そつなんや」

と、泉谷は池田の顔をどこか気遣わしげな表情で見ると、どんな表情を浮かべたらいいのかわからないといったように、曖昧な笑みを浮かべた。

「もう諦めたんや？」

「まあな」

と、池田は眼差しを伏せて口元で少し笑った。

「いつまでも待っててもしやあないしな」

「・・・そつか。それやったらいいんやけど」

泉谷は池田の科白に言い淀むようにそこで一旦言葉を区切ると、少し躊躇ってから、

「いや、実はな」

と、泉谷は言った。

「この前の土曜日、俺、池ちゃんの彼女、見かけてん」

池田は、泉谷の言葉に、それまで俯けていた顔をあげて、泉谷の顔を見つめた。泉谷は何度か池田も交えて優貴と出かけたことがあるので優貴の顔は知っている。

池田が黙っていると、泉谷は言葉を続けて言った。

「この前な、彼女と一緒に買い物にいつてんけどな、そのときに、見かけてん。池ちゃんの彼女。遠くから見かけただけやから、もしかしたら見間違いかもしれへんけど、でも、たぶんあれは池ちゃんの彼女やったと思うで。誰か知らん男のひとと一緒に歩いとった」

「そうなんや」

と、池田は相槌を打った。何をどう言ったらいいのかわからなかった。そんなことじゃないだろうかと覚悟はしていたつもりだったが、泉谷の口から改めてそう聞かされると、池田はやはりショックが大きかった。

「このことを言おうかどうか迷ってんけどな」

と、池田が言葉を見つけられずにいると、泉谷はいいわけするように付け足して言った。

「でも、一応言っておいたほうがいいと思ってな」

池田は泉谷の科白に黙って頷いた。

「まあ、もしかしたら、俺の見間違いかもしれへんけどな」と、泉谷は励ますように微笑して言った。

「いや、でも、たぶん、見間違いじゃないと思うで」

と、池田は少し間をあけてから、なんでもないふうを装って言った。池田としては友人に心配されなくなかった。
「これで色んなことがはつきりするもんな。突然彼女が別れたいって言い出したのも、連絡がつかへんかったのも」

池田は一旦そこで言葉を区切ると、泉谷の顔を見て、

「でもまあ、これで良かったんかもな、色々はつきりしたし」

池田は力なく笑って言った。泉谷は池田に誘われるようにして口元を曖昧に笑みの形に変えると、少し間をあけてから、

「でもまたそのうちいいことであるで」

と、慰めてくれた。

「そうやな」

と、池田は頷いて軽く笑った。それから、池田は心のなからせり上がってくる感情を無理に押さえ込むように、グラスに残っていたビールを一息に飲み干した。

21

それでも明日はやってくる。たとえどんなに明日という日がやってくることを望んでいなくても。

仕事を終えアパートに帰宅し、風呂に入り、ぐったりと疲れきった状態でベッドに入る。ベッドに入って瞼を閉じるときに、池田はふと暗い気持ちになる。もう明日という日なんてやってこなくてもいいかなど。ただこのままずっと静かに眠っていたいと。それでも、当たり前なことではあるが、そんな池田の意志とは無関係に、夜が明ければ、また新しい一日がはじまる。

ちよつと大袈裟かもしれないが、自分にとって会社での時間は、水中のなかですつと息を止めているみたいだ、と、池田は最近感じることがあった。

中島の送別会からもう二週間以上が経過したが、一向に主任の池田に対する態度は変わらなかった。面倒な仕事は押しつけられるし、何かミスをすれば、必要以上に嫌味を言われた。池田は一体自分は何のためにこんな毎日を我慢しているのだろうとしばしば思うようになった。

決して今の仕事が嫌いなのではないが、かといって、どうしてもこの仕事を続けてきたいと思っているわけではない。会社のなかに特別親しい人間がいるわけでもない。いつそ今の会社を辞めてしまおうか。池田は何度となくそんな思いに駆られる。

でも、と、池田は一方で思う。もし、ここで自分が会社を辞めたりしたら、それこそ主任とって都合の良い結果になるだけなんじゃないのか。池田はたとえどんなことがあっても、主任を喜ばせてやるようなことはしたくなかった。

でも、じゃあどうすればいいのだろう。このままずっと主任の嫌がらせを耐え忍んでいくしかないのだろうか。

池田は確かな答えを見つけれなかった。見つけれないままに、必要以上に心は落ち込んでいった。

そんなふうな気持ちが沈んでしまうのは、この前泉谷から話を聞いたせいもあるのかもしれない。街で優貴を見かけたという話

あれから池田は泉谷と別れて自分のアパートに戻ったあと、ケータイのアドレスから優貴の連絡先を削除した。そうすることで、未練の気持ちを断ち切ろうとしたのだが、結果はかえって、惨めな喪失感が深まっただけだった。

まだ根っこの部分には優貴に対する想いがどうしようもなく残っていたし、それは池田の心に眠っている様々な暗い思いを呼び寄せて、たださえ疲労している池田の心を余計に暗い場所へと追い詰めていった。

22

その日、アパートに帰り着いたのは、夜の十一時を過ぎていた。仕事がなかなか片付かなくて帰るのがいつもよりも遅くなってしまったのだ。

明日は明日でまた仕事がある。八時には会社に着いていなければならないので、遅くとも朝の六時半には起きなければならない。

これから風呂に入って、ご飯を食べて、テレビを見たりしていたら、もうすぐに一時過ぎだ。何も自分のやりたいことをやる時間がない・・・そして、また明日、あの主任の顔を見なければならぬのか。

そのとき、ふいに、池田の心の中に、自分でも上手く説明のつかない、色んな感情がごちゃ混ぜになった、激しい苛立ちのようなものがこみ上げてきた。一瞬、色んなことが忌々しくなった。仕事のこと、優貴のこと、将来のこと、生活のこと、なにもかも。

もう何もかもが嫌だと、池田は思った。全て投げ出してしまいたい、と、自棄になった。それが大袈裟な感情であることはわかっていたが、しかし、池田はそんな発作にも似た感情をどうすることもできなかった。

ソファーに座ってしばらく時間をおくことで、さっきまでの突発的な感情の高まりはいくから収まったものの、池田は何もする気になれなかった。風呂に入るのも、これから食事をするのも、眠るのも、全て億劫に感じた。ただ何もかもが面倒だった。面倒というよりは哀しいのかもしれない。自分という存在を消し去ってしまいたいと思った。

十五分か、二十分、そうしてソファーでぼんやりと自分の感情の流れに身を任せていたあとで、池田はふと久しぶりにあそこへ行ってみようと思いついた。池田はその場所のことが無性に懐かしくなった。

その場所のことを、池田たちは昔から「星見」と呼んで親しんでいた。「星見」というのは、べつに星が綺麗に見える場所のことではない。大阪郊外にある、夜景が見える場所のことだ。

その場所は、池田が普通っていた大学の近くにあつて、あまりひとに知られていない。池田が大学のあたりを車で走っているときに偶然見つけて、いつしか池田の友達みんなでときどき通うようになったのだ。

何故その場所のことを「星見」と呼ぶようになったのかはわからない。徹夜明けの朝にみんなで車でその場所に出かけて、そこから

見える星空が綺麗だったことから、太陽がそう呼んで、いつの間にかそれがみんなに浸透したような気がするが、でも、そんな気がするだけで、実際はそうではないのかもしれない。池田の記憶は曖昧だった。

ただ池田のなかでその場所は特別な場所だった。大学生のときも、何か上手くいかないことがあって落ち込んだりすることがあると、池田はひとりですくその場所に通ったものだった。

池田はアパートから外に出ると、駐車場まで歩き、自分の車に乗った。そして池田の今住んでいる場所から片道一時間程かかる「星見」を目指した。「星見」に行つて帰つてくると、眠るのは深夜の二時を過ぎてしまうことになるが、そのとき池田はもうどうでもいいような投げやりな気持ちになっていた。

23

もう夜の十二時を過ぎているということもあつて、車道に車の数は少なく、予想していたよりもずっと短い時間で目的の場所に辿り着くことができた。

池田は道端の隅に寄せて車を駐車すると、車を降りた。

「星見」はちょっとした山のうえにあるので、空気はひんやりとして肌寒い。まるでその場所だけ、一ヶ月ほど早く季節が進んでいるかのようだ。もう少し厚着をしてくればよかったな、と、池田は軽く後悔した。

少し歩いて、展望台のうえに上がる。展望台といっても、観光地

にあるような立派なものがあるわけではなく、木材で間に合わせで作った、ちよつと大きめのベランダのようなものが備えつけてあるだけだ。

池田は展望台に上がると、歩いて行って、手すりにもたれかかり、そこから見える大阪の街の光をぼんやりと眺めた。

オレンジ色がかった、淡い光が遠くに見える。瞳のなかから池田の心に沈みこんだいくつもの光の欠片は、池田の心を微かに震わせていった。

一瞬、池田のなかで何かが大きく膨張して、またもとに戻るような感覚があつた。

最後にこの場所に來たのはいつのことだろうと池田は思い返した。あれはたぶん、大学を卒業してすぐのことだと池田は思い出した。卒業式の何日か後に大学の親しい友達にみんなが集まって飲んで、それでそのあとにみんなでこの場所に來たのだ。確か。

あの頃から比べて、自分は少しでも成長できたのかな、と、池田はふと思つた。少しでも前に進むことができたのだろうか。

たぶん、答えはノーだ。あの頃持っていた希望や、可能性を失つてしまったという意味では、むしろ逆に後退してしまったといえるのかもしれない。

結構自分なりに努力してきたつもりだったんだけどな、と、池田は心のなかで力なく笑つた。でも、それはたぶん、ただのつもりだったのだろう。まだまだ努力が足りなかったのだ。時間だけが・・・そう、時間だけが、ただ流れすぎていつてしまったんだな、と、池

田は心のなかから何かが零れ落ちていくように思った。

池田は何かを閉じ込めるように強く瞼を閉じた。そうして、しばらくあいだそのままできてから、閉じていた瞼をゆっくりと開いた。

それにしても、生きていくということは何んて難しいんだろう、と、池田は今更のように痛感した。自分はべつに有名になりたいわけでも、お金持ちになりたいわけでもない。ただ、ささやかな自分だけの居場所が欲しいだけだ。

けど・・・。

いや、でも、そんなふうに住今の自分の状況を嘆くのはただの甘えかもしれない。世の中には自分なんかよりもっと過酷な状況に置かれているひとたちだっているのだから。なにをこれくらいのことでは自分はくよくよしているのだろうか。しっかりしろよ、と、池田は心のなかで自分を叱咤した。でも、そうしても、心に上手く力は入らなかった。心はいつの間にか冷えて硬く強張ってしまっていた。

池田は改めて遠くに見える街の光を眺めた。じつと見ていると、その美しい光の集まりは懸命に池田に何かを伝えようとしているようにも見えた。でも、池田には光が一体自分に何を語りかけようとしているのか、どれだけ耳を澄ませてみても聞き取ることではできなかった。

ただ聞こえるのは、耳元を吹きすぎていく少し冷たい風の音だけだった。

第十二話

24

泉谷も交えて中島と食事に行く日は、十一月最初の土曜日に決まった。池田がそのくらいであれば時間を作ることができそうだと中島にメールを送ると、じゃあその日にしましょうと中島から承諾の返事が帰ってきたのだ。

池田は泉谷とは家が近所なので一緒に電車に乗って出かけ、待ち合わせ場所の梅田駅で、中島とその彼氏と合流した。

中島の彼氏と顔を合わせるのははじめてなので、池田も泉谷も少し緊張しながらお互いに自己紹介を交わした。中島の彼氏の名前は寺岡琢磨といい、その一見怖そうな外見とは対照的に話しやすく明るい雰囲気ですぐに打ち解けた仲になった。

どこに食べに行こうかと四人は梅田駅周辺を転々としたあげく、最終的に食べ放題の焼肉屋を見つけて、そこに入ることにした。

さすがに休日の夜ということもあって店は混雑していたが、それほど待たされることもなく、四人は席に通された。

席につくと、程なくして注文を取りに来た店員に、四人は焼肉の食べ放題のコースを注文し、それから各々好きな酒を頼んだ。

オーダーした酒はすぐに運ばれてきて、四人は乾杯してからお互い

の近況を報告し合った。

聞いたところでは、中島たちふたりはもう既に東京に住むところを決めてきたという話だった。

「いつ間に決めてきたん？」

と、池田がいささか驚いて尋ねると、中島は小さく笑って、

「会社辞めたあとすぐですね」

と、答えた。

「こつというのは早く行動した方がいいだろうと思って」

「でも、新しく何かをはじめのつていいよな」

と、泉谷はまるで自分が新しい生活をはじめのかのようなうきうきとした口調で言った。

「そうですね」

と、中島は泉谷の科白に微笑して相槌を打った。

「色々不安なこともあるけど、でも、いまは楽しみなことの方が多
いかな」

「東京に行こうって言い出したのは俺の方なのに、なんかコイツの
方が妙に張り切っちゃってるんスよね」

と、中島の隣に腰を下ろしている寺岡が苦笑するように笑って言
った。

「新しい仕事さきとかは決まってるの？」

と、池田がふと気になって尋ねてみると、中島は頭を振った。

「まだ何も。でも、最初はバイトでいいかなって。この前決めてき
たアパートも家賃五万円くらいでそんなに高くないし、彼氏もバイ
トするって言ってるし、家賃も折半すれば半額になるし。だからな
んとかかなりそうかなって。貯金もちよつとだったらあるし」

「そつか。ちゃんと色々考えてるんやな」
「一応は」

中島は池田の科白に小さく笑って頷いた。

「まあ、ほんまは養ってほしいんすけどね」
と、寺岡が冗談めかして言う

「はあ？何言ってるのよ。あんた」

中島に一蹴された。

そんなふたりのやりとりに誘われるようにして池田も泉谷も少し笑った。

と、ちょうどそのころに、四人が注文した焼肉用の肉がテーブルのうえに運ばれてきた。それからしばらくはみんな焼肉を食べるのに夢中になって口数も少なくなった。

ある程度腹が膨れたところで、

「でも、ほんまにこの前のライブ、すごい良かったですよ」

と、池田は自分の向かいの席に座っている寺岡に向かって感想を述べた。

「あれやったらほんまにプロになれそうかも」

池田の科白に、寺岡は照れ臭そうに笑った。

「そんなふうに言ってくれるなんて、池田さんいいひとですね」

「いや、お世辞とかじゃなくて、ほんまに」

「東京にはバンドのメンバーみなでいくんですか？」

と、それまで黙っていた泉谷が途中で口を挟んだ。

その泉谷の問いに、寺岡は若干表情を曇らせて首を振った。
「いや、東京に行くのは自分だけですな」

と、寺岡は目線を落として、残り僅かになったビールを口元に運びながら答えた。

「実はバンド解散しちゃったんですよ」

と、寺岡は苦笑して言葉を続けた。

「この前まで組んでたバンドのメンバーってみんな同い年くらいなんスけど、みんな二十六とか、八とかそれくらいで・・・それでみんななかなか結果出せないから、そろそろいい年だし、バンド辞めようっていう話になって。

でも、まだ俺はまだ諦めたくなくて・・・っていうか、未練があつて、だから、そういうのもあつて、今回東京に行くことにしたんスけどね。最後に、もう一回だけあがいてみようかなって。無駄かもしれないですけど」

寺岡はそこまで話すと、それまで俯けていた顔をあげて泉谷の顔を見ると、困ったように曖昧に少し笑った。

「そっか。でも、確かに色々悩みますよね」

と、泉谷は寺岡の言葉が予想外だったようで、いくらか氣遣わしげな表情で言った。

「・・・なんでなんスかね。寺岡さんたちのバンドやったら、普通にプロとしても通用しそうな気がするんですけどね」

寺岡は泉谷の発言に口元で力なく笑った。

「そう言ってもらえてすごく嬉しいです・・・俺も、自分の演奏とか曲にはある程度自信あるつもりなんスけどね・・・でも、まあ、どうしようもないですからね。こういうのって巡り合わせだから・・・それに、こんなこと思ってるやつらなんて一杯いるんだろっし」

寺岡はそこで言葉を区切ると、

「でも、とりあえず、東京でやれるところまでやってみます。俺、いま二十七だから、三十歳くらいまでは。それでもしだめだったら、また考えます」

寺岡はそう言って笑顔を浮かべた。

つられるようにして池田は微笑むと、

「東京行ったら、意外とすぐ結果だせるかもしれませんよ。今のうちにサインもらつとこうかな」

と、冗談めかして言った。

「あ、俺もお願いします」

と、池田の言葉に、泉谷も続いた。

「ふたりとも気が早いすぎです」

と、寺岡はそう言って可笑しそうに笑うと、顔の前で手を振った。

それから、しばらくのあいだは音楽談義になった。高校のときにどんな音楽を聞いていたかとか、好きな曲について。

一通り音楽に関する話題がつかたところで、

「東京にはいつぐらいに発つつもりなん？」

と、池田は一枚だけ余っていた肉を皿のうえに運びながら中島に尋ねてみた。すると、中島は、

「一応、十二月の頭を予定してます」

と、短く答えた。

「一応、日曜日なんで、もし暇だったら、見送りきてくださいよ。寂しいんで」

と、中島はいたずらっぽく笑って言った。

「自分で言うなって」

と、中島のとなりで寺岡が笑って突っ込みを入れた。
つられるようにして池田は軽く笑うと、

「でも、ほんまに時間あつたらいくわ」

と、池田は微笑して言った。

「中島さんたちには頑張ってもらいたいしいな」

「ほんとですか!？」

中島は池田の発言にほんとうに嬉しそうな笑顔で言った。

「ほんじゃ、俺も行こうかな」

と、泉谷が池田のあとから遠慮がちな声で言った。

「なんか賑やかな出発になりそうですね」

と、寺岡は微笑んで言った。

25

中島たちと別れたあと、池田はまた泉谷と一緒に電車に乗って帰った。

途中まで方向は同じなので、池田はアパートまでの帰り道を泉谷と一緒に並んで歩いた。もう午前零時近くになった街に人影は少なかった。肌寒いせいか、街を彩っている街灯の光は妙に暖かく、しんみりとして感じられる。

「でも、ふたりにはほんとに頑張ってもらいたいよな」

と、池田は歩きながら、今日中島たちと交わした会話をふと思い出して泉谷に話しかけた。

「そっやなあ」

と、泉谷は池田の科白に曖昧な笑みを浮かべて静かに頷いた。

思い出したように少し強い風が吹きぬけていった。十一月に入つていよいよ風も本格的に冷たくなってきた。どこか近くの空き地で鳴いているらしい虫の鳴き声が、風がふきすぎていったあとに静けさを引きたてるように聞こえた。

「でも、あれやな」

と、少しの沈黙のあとで、泉谷は池田の方を振り向くと言った。

「今日、中島さんの彼氏も言っとったけど、やっぱ、俺らくらいの年齢になると、それまで目指してたものとかみんな諦めていつてしまうよなあ」

そう言った泉谷の口元に浮かんでいる微笑は、どこか寂しそうにも映った。

「まあ、年齢的なこととか色々あるし、ある程度仕方のないことなんやろうけどな」

泉谷は池田が黙っていると、自分に言い聞かせるようにそう続けた。

池田は泉谷の科白に耳を傾けながら、つい最近故郷に帰っていった友人のことを少し、考えた。彼は今頃どうしているのだろうと池田は思った。

「でも、なんか嫌やな」

泉谷は話し続けた。

「いつも間にか現実なんてこんなものやって諦めるのが当たり前みたいになつてみたいで」

太陽は微笑して言った。

「これからさきの未来にいいことなんて何もないような気がしてしまっやん」

「確かに」

池田は曖昧に微笑して頷いた。確かに泉谷の言うとおり、いつの間にか気がつかないうちに、何かを諦めることが、上手くいかない現実を受け入れることが、当たり前前のことになってしまっているような気がした。どうすれば傷つかずにすむか、失敗せずにいられるか、そんなことばかり考えている自分がいるようで池田は嫌になった。

「でも、だから余計に」

と、泉谷は少し感覚をあけてから微笑んで言葉を続けた。

「中島さんたちには頑張って欲しいよな。俺らとは違って、前に向かって進んでいった欲しいと思うよな」

そう言った泉谷の声は、どこか願うようにも響いた。

ふと、何気なく視線あげると、そこは月が見えた。月は半透明の淡い銀色のひかりをこちらに向かってやわらかく投げかけていた。それは目に冷たいような光だった。池田はまるで雨降りを確認するときのようにそっと手を差し出すと、舞い降りてくる月の光を掌に受けてみた。すると、掌に一瞬微かな温もりが伝わって、でも、それは雪が溶けるようにすぐ消えた。

第十三話

26

十一月の半ばから後半にかけてばたばたと色々なことが起こった。

まず池田は三ヶ月ぶりくらいに優貴と再会した。それから、池田はそれまで勤めていた会社を辞めることにした。

池田が優貴の姿を偶然見かけたのは、外回りの営業を終えて、会社に向かつて帰っている途中だった。

会社に向かつて歩いていると、池田は反対側の通りに見覚えのある女の顔を見かけた。それは優貴だった。一瞬、見間違いかなもしれないと思ったのだが、しかし、それは間違いなく優貴だった。通りを挟んだ向かい側にはカフェがあつて、彼女はいまそのカフェに入ろうとしているところだった。

咄嗟に、池田は「優貴！」と彼女の名前を叫びそうになった。もしかしたらこれまで彼女が連絡をくれなかったのは何らかの事情があつたのかもしれない、と、池田は思った。考えてみれば自分ももう長いあいだ彼女に連絡をしていなし、彼女の方でも自分が連絡してきてくれるのを待っていたのかもしれない、と、ふとそんな考えが浮かんだ。

話してみれば、意外と彼女はいまでも自分のことを好きでいてくれるんじゃないか。自分のことを必要としてくれているんじゃないか。池田のなかで突発的に彼女に対する未練の気持ちが強まって、つい池田はそんなふうに自分にとって都合の良いように解釈してしまった。すぎるようにそんなことを思ってしまった。

だから、池田は「優貴！」と、彼女の名前を叫びかけた。でも、池田が彼女の名前を呼びかけたまさにその瞬間に、彼女はにっこりと微笑んで、後ろを振り返った。すると、そこには池田の知らない若い男がいた。まるで安っぽいドラマのワンシーンみたいに。ほんとにこんな偶然が起こることがあるんだ、と、池田は啞然とした気持ちになった。

池田は開きかけていた口を閉じ、優貴とその自分の知らない男がカフェに入っていくのを黙って見送った。優貴は全く池田の存在には気がつかなかった様子だった。

やがて、ふたりの姿が完全にカフェのなかに消えてしまうと、池田は再びゆっくりと歩き出した。歩きながら、池田は思った。この前泉谷が話していたことはやっぱりほんとうだったんだな、と。自分は知らないうちに彼女に裏切られていたのだ。

でも、不思議と腹は立たなかった。自分だってもし状況が違えば彼女と同じようなことをしていたのかもしれないと思った。彼女のことを責める気持ちは起きなかった。

ただ、池田は少し悲しいだけだった。誰も自分のことを愛してくれるひとはいないんだな、と、思うと、心から温度が消えていくように孤独な気持ちになった。

吹き付ける風がやけに冷たく感じられた。

27

気がついたときには池田は主任を殴り飛ばしてしまっていた。殴られた就任は派手な音をたてて座っていた椅子ごと後ろに転倒した。やがて立ち上がった主任は殴られた口元を手でかばいながら池田のことを口汚く罵った。こんなことをしてどうなるかわかっているんだろうな、と、声高に主任は叫んだ。

池田は小さな声でわかっています、と、答えた。もうあんたの顔なんて二度と見たくないんだ、と、池田は言った。

その日、池田と主任はたまたまオフィスにふたりにきりになった。池田が自分の机で残業をしていると、どこかに出かけていたらしい主任が、池田ひとりしかないオフィスに戻ってきたのだ。

早く帰ればいいものを、その日主任はなかなか帰ろうとはしなかった。珍しく残業でもしているのか、自分の机で何か作業をしていた。そして案の定、しばらくすると、主任は池田に声をかけてきた。

またはじまったか、と、池田はうんざりした気持ちで思った。このひとは一日一回は自分に対して何か嫌味を言わなければ気がすまないのだろうか、と、池田は心のなかでため息をついた。

話があるからこつちにこいよ、と、主任は言った。それで池田はそれまで座っていた椅子から立ち上がると、主任のデスクの前まで歩いていった。

池田が歩いていくと、主任は俯けていた顔をあげて池田の顔を見た。そして自分の机の上を指し示して、

「これ、何かわかる？」

と、訊いてきた。

見てみると、主任の机のうえには何かの資料のようなものが置かれている。

「なんですか？」

と、池田が逆に尋ねてみると、主任はどこか池田のことをバカにしたような小さな笑みを浮かべて、

「今年の売り上げを書いた紙だよ」

と、告げた。

池田がどう言ったらいいのかわからずに黙っていると、

「今年は売り上げが下がってんだよ」

と、主任は言葉を続けた。

「さっきも部長に呼ばれてそのことで叱られてたんだよ。一体どうなってるんだってさ」

池田は答えようがなかったので何も言わなかった。

「なんでだと思う？」

と、主任はわずかに間をおいてから尋ねてきた。

「なんで売り上げが下がったと思う？」

池田はわからなかったので、わからない、と、答えた。池田は言われた仕事をこなしているだけなので、経営のことまではわからなかった。

「お前のせいだよ」

と、しばらく間をおいてから主任は言った。

「お前がトロトロ仕事してんのが悪いんだよ」

と、主任は決めてつけて言った。

「だいたいいつもなんでお前だけこんな遅くまで仕事してんの？他のみんなは帰ってんのにさ」

それはお前が色んな仕事を俺に押し付けてくるせいだろうが、と、池田は憤りを感じたが、しかし、我慢して何も言わなかった。すみません、と、ただ謝った。

「すみませんじゃねえよ！」

と、主任はいくらか激昂して言った。そして持っていたボールペンを池田の顔に向かって投げつけた。

「なんで俺が部長に怒られなきゃいけないんだよ」

主任は顔を赤くしてそう怒鳴った。

「だいたいお前の顔を見ると、イライラしてくるんだよ。仕事できねえし。使えなねえし。愛想悪いしさ。・・・ほんと、この前、中島さんじゃなくて、お前が辞めりゃあ良かったんだよ」

無茶苦茶な言われようだったが、池田は主任の言っていることにいちいち腹を立ててもしょうがないと思った。好きなように言えばいいと思った。

「お前さ、今度辞表出して、代わりに中島さん連れ戻してきてよ。」

お前中島さんと仲いいんだろ？」

主任は冗談のつもりなのか口元に笑みを浮かべて言った。

池田はと言えばいいのかわからなかったので黙っていた。

しばらくの沈黙があった。

「中島さん、今度東京に行くらしいじゃん？」

いくらかの沈黙のあとで、主任はどこからそんな情報仕入れてきたのか口を開くと言った。

池田が否定も肯定もせずにいると、

「なんでも付き合ってる彼氏と一緒にいくらしいじゃん。中島さんの彼氏、バンドやってるんだって？」

と、どこかバカにしたような笑みを浮かべて主任は続けた。

「中島さんはもうちょっと頭のいい子だと思ったんだけどなあ」

主任は薄ら笑い浮かべて楽しそうな口調で言った。

「なんでそんなヤツと付き合ってたんだろ。東京でバンドなんかやってたって結果は目に見えてんのに。プロになんてなれるわけねえじゃん。青春ごっこもいい加減にしろよな。身の程をわきまえろつうの。何がバンドだよ。バカじゃねえの」

主任のその科白を聞いた瞬間、池田のなかでそれまで堪えていた何かが弾け飛んだ。池田は許せなかった。友人をバカにされたことが。友人がそれまで目指してきたものを、大切にしてきたものを、頭ごなしに否定されたことが。お前に一体何がわかるというのだと池田は思った。

友人たちだつて何も考えていないわけじゃないのだ。なかなか思い通りにいかない現実のなかで彼らなりに必死に前に進もうとしているのだ。していたのだ。お前に何がわかるっていうんだ！

気がついたとき、池田は主任の顔を思いっきり殴り飛ばしていた。殴られた主任は座っていた椅子ごと派手に転んだ。

やがて身体を起こした主任はまさか殴られるとは思っていなかったのか、その顔に一瞬怯えたような表情を浮かべたが、すぐに口汚く池田のことを罵り始めた。俺にこんなことをしてただですむと思ってるのか、と、主任は怒鳴った。社長に頼んで、お前なんか首にしてやるからな、と、主任は脅した。

首か、と、池田は顔を赤くしてわめきたてる主任の顔を見ながら妙に冷静な気持ちで思った。首で結構だと池田は思った。もう、あなたの顔なんて二度とみたくないんだ、と、池田は心のなかで吐き捨てるように思った。

そして、まだ何かを叫び続けている主任に池田は背を向けると、自分の荷物をまとめて、そのままオフィスをあとにした。まだやりかけの仕事が残っていたが、そんなことは知ったことか、と、開き直った。主任が残って続きをやればいいのだ。

オフィスを去ろうとしている池田の背後で、主任はまだ何かを叫び続けていたが、しかし、池田は構わずに歩き続けた。

第十四話

28

中島とその彼氏を見送りに行く日、空は晴れ渡った。

空にはまるで冬の冷たさを取り込んだような透き通ったきれいな青空が見えた。空には小さな雲がぽつんぽつんとどこかのんびりとした表情で浮かんでいる。

池田は約束通り中島たちふたりの見送りに行くこととした。見送りにには泉谷も一緒についてきた。

駅に見送りにきているのは池田たちだけではないようで、中島とその彼氏の知り合いらしいひとたちの姿も幾人か見受けられた。

「池田さんたちほんとにきてくれたんですね」

と、中島は池田の顔を見ると、にっこりと微笑んで言った。

「今日はたまたま暇やったしな」

池田は微笑して答えた。池田は中島には会社を辞めたことは伏せておくことにした。もし池田が会社を辞めてしまったことを知ったら、彼女はきつと自分のせいだと責任を感じるだろうと思ったからだ。池田は彼女に余計な心配をかけたくなかった。

あの日、主任を殴った日の翌日、池田は部長に呼び出された。池田はその日会社を辞めるつもりで辞表を持っていていたのだが、

それよりもさきに解雇されることになるのか、と、池田は自嘲気味に思った。でも、まあいいか、と、池田は思い直した。そのぶん手間が省けて良いかもしれない。

池田が部長の部屋のドアを軽くノックすると、ドアの向こう側から返事があつて、入室を促された。

部屋に入ると、池田は部長が口を開く前に、黙って、辞表を書いた紙を差し出した。部長はそれを受け取ると、中身を確かめて、それをテーブルの上に戻した。

「きみは会社を辞めるつもりなのか」

と、部長は池田の顔を見ると言った。

池田は、はい、と、頷いた。

「話は聞いているよ」

と、部長はしばらく間をおいてから言った。

「すみせん」

と、池田は頭を下げた。やはり主任は昨日のことをもう既に話していたのか、と、池田は半ば呆れながら思った。

「あのときは頭に血が上ってしまっていて・・・でも」

部長は片手をあげて池田の言葉を遮った。

「弁解はしてなくてもいいよ。暴力を振るうのは良くないことだが、でも、どうせあいつがきつとまたろくでもないことを口にしたんだろっ」

部長はそこで言葉を区切ると、何かを考えるように眼差しをテーブルの上に落とした。

「いや、あいつには俺たちもちよつと困ってるんだよ」

と、しばらくしてから部長は顔をあげると言った。

「あいつは俺たち兄弟のなかでも一番年下だから、どうも甘やかされて育ったところであるみたいでね・・・その、なんというか、すごく子供っぽいところがあるんだ。気に入らない人間がいるとすぐに辛く当ったりしてね・・・再三注意はしているんだが、なかなか効果がなくてね」

池田は部長の言葉に何と言えいいのかわからなかったので黙っていた。池田は部長からまさかこんな言葉がでるとは考えてもみなかった。

「どうだろう」

と、部長は池田が黙っていると言葉を続けた。

「会社を辞めるのは考えなおしてもらえないだろうか？きみの仕事ぶりはなかなか熱心なところがあるし、僕としてはできればきみに会社に残ってもらいたいと考えているんだ

・・・もちろん、きみもあいつと一緒に働き辛いだろうから、ちゃんとそれも考えているよ。あいつには来月から九州に行ってもらうつもりだ。今度九州に進出する計画があつてね、あいつにはそっちのプロジェクトに入ってもらうつもりだ」

池田は部長の言葉に頭を振った。部長の申し出はありがたかったが、しかし、もう既に池田の決意は固まっていて、今更会社に残るつもりはなかった。新しい場所で最初からやり直してみたいという気持ちの方が強かった。

池田がそのことを部長に伝えると、部長はいくらか残念そうな表情はしたものの、最終的には池田の気持ちを尊重して、会社を辞め

ることを認めてくれた。

「また機会があったら東京にも遊びにきてくださいよ」

と、中島のとなりに立っている寺岡が微笑んで言った。

池田は寺岡の言葉に曖昧に微笑して頷いた。

「そっちもたまには大阪に遊びにきてや」

と、池田のとなりで泉谷が明るい声で言った。

「ほんまやで」

池田も泉谷の科白に賛同して言った。

「もちろん」

池田と泉谷ふたりの言葉に中島は小さく笑って答えた。

「わたし、大阪のこと愛してますから」

そのうちに、中島たちふりたが乗る予定の新幹線がホームに入ってきた。

「じゃあ、東京でも頑張つてな」

と、池田はふたりが乗降口から新幹線に乗り込むと、その声をかけた。

「何か色々ありがとうございました」

と、中島は乗降口に立ったまま、今にも泣き出しそうな表情で言った。

「池田さんたちに出会えて色々楽しかったです」

「俺も、池田さんたちと出会えて良かったです」

中島のとなりで寺岡が笑顔で言った。

「いつになるかわからないけど、絶対結果だすつもりなんで、みと

いてください」

「楽しみにしてるわ」

と、池田は微笑して言った。

やがて、新幹線の発車するアラームがなって、ドアがゆっくりと閉まった。

中島は乗降口に立ったまま、池田たちふたりに向かって手を振った。池田は軽く手をあけて中島に応えた。

動き出した新幹線はすぐに遠くに見えなくなった。池田はあげていた手をゆっくりともとに戻した。

「行ってしまったな」

と、車両の姿が見えなくなってしまつと、池田のとなりで泉谷が名残惜しそうに言った。

池田は泉谷の言葉に黙って頷いた。

それから、池田は中島たちふたりの姿を辿るように、新幹線が去っていったあたりの空間を黙って見つめた。空から舞い降りてくる微かに黄金色の色素を含んだ暖かな日差しが、その空間を穏やかに輝かせていた。池田はそんな眩しい世界を見つめながら、中島たちの未来を思った。池田は純粹に彼らが東京で成功できるかといいなと思った。そして自分も頑張ろうと思った。少しずつでも、前に向かって進んでいけるように。

思い出したように少し冷たい風が吹き抜けいき、それはどうしてか誰かの哀しい歌声のようにも聞こえた。

第十五話

29

少し歩き疲れたので、池田は駅前のベンチで休憩することにした。まだ面接までは十分に時間がある。

池田の目の前をたくさんのひとたちが忙しそうに足早に通り過ぎていく。

ふと空を見上げると、そこには冬特有のどんよりとした冷たい灰色の空が見えた。

もう、中島たちが東京に行ってから約二ヶ月が経過した。

この前池田は久しぶりに中島にメールを送ってみたのだが、中島は東京で元気にやっているらしかった。なんでも今は雑貨屋さんでアルバイトをしているらしい。まだ標準語に馴染めなくてときどき大阪がすごく恋しくなると彼女はメールで書いていたが、彼女は東京での新しい生活をそれなりに楽しんでいるようだった。中島の彼氏も東京で順調に音楽活動をはじめていているようで、この前いつのかレコード会社にデモテープを送ったところらしい。

池田は会社を辞めてから結構たくさんの数の会社の採用試験を受けた。そのうちのいくつかからの会社からは比較的良好な返事がもらえていて、今日これから面接に行く会社は、一応社長との最終面接と

いうことになっている。無事内定をもらうことができるかどうか池田はいまひとつ自信がなかったが、とりあえず今は自分なりにベストを尽くそうと思っていた。駄目だったら、またそのとき考えればいい。

池田は空をゆっくりと流れていく冷たい灰色の雲を見つめながら、ここ半年ばかりの歳月を振り返ってみた。考えみると、この短い期間のあいだにずいぶん色んなことがあったような気がした。恋人を失い、会社を辞めた。どちらも全然大したことではないかもしれないが、しかし、そのことを思い出すと、池田はふと哀しいような気持ちにもなった。自分がこれまで信じてきたことは全て無駄だったのかな、と、池田は心から何かが失われていくように感じた。

空に向けていた視線を足元に落とすと、そこには名前の知らない小さな草の花が咲いていた。歩道の敷石の隙間から雑草が生えていて、その雑草が小さな花を咲かせているのだ。淡い青色の小さな花だった。こんな寒い季節に花を咲かせる草があるんだな、と、池田は思った。それから、池田はふとこの前友人が自分に送ってくれた小説のことを思い出した。

武田洋介から年賀状代わりの手紙が届いたのは、一月のはじめのことだった。その手紙のなかで武田は自分の近況を伝えてきていた。今自分は実家に戻って家業を手伝っていること。慣れないことが多くて大変だが、でも、それなりに充実した毎日を送っていること。

そして、武田は手紙の最後にこう記していた。実は自分は実家に戻ってから再び小説を書くようになったのだ、と。最後に大阪で池

田に会ったあの日、自分はもう小説は書かないと宣言したものの、やはりどうしても小説に対する未練の気持ちが捨てきれなくて、性懲りもなくまた書き始めてしまったのだ、と、武田は手紙のなかで弁解していた。

その手紙には最近彼が書いたという短い小説も同封されていた。池田は早速その同封されていた小説を読んでみたのだが、その『冬の花』というタイトルの小説は、小説として優れているかどうかはわからないものの、池田の好きなタイプの小説だった。読み終わったあと、静かで、優しい気持ちになることができる。

物語の主人公は三十代前半の女の人で、彼女は離婚していて、ひとりの幼い娘がいる。東京に住んでいる彼女は過去の色んなことを忘れたくて、地方の海辺の小さな町に引越すことにする。その小さな町には大学時代の古い友達が住んでいて、その友達がこっちに来ないかと彼女のことを誘ってくれたのだ。

やがて海辺の町に引越した彼女は、娘を通して、その土地で様々なひとたちと出会い、成長していく。そして過去を乗り越えて、前向きに生きようという気持ちに少しずつなっていく。

物語の最後で、冬にしか咲かない花の種を娘と一緒に植える場面があるのだが、池田は足元に咲いている名前の知らない花を見つめているうちに、武田の書いたその小説のことをふと思い出した。

池田は俯けていた顔を上げて、もう一度空を仰いでみた。いま見

上げた空には分厚い雲がかかっているが、でも、この雲を抜けた向こう側にはきれいな青空が広がっているはずだ、と池田は思った。そう。雲のない、明るい世界がそこには広がっているはずなんだ、と、池田は思った。

今日はこのあと久しぶりに泉谷と会う予定になっている。池田が今日会社の最終面接があると伝えたら、泉谷が内定決定の前祝で急に奢ってやると言い出したのだ。今日は奢ってやると言ったことを後悔させてやるくらい、たくさん飲み食いしてやろうと池田は思った。池田があまりにもたくさん飲み食いするので、慌てる泉谷の顔が今から目に浮かぶようで池田は可笑しかった。

腕時計で時刻を確かめると、もうそろそろ面接の時間だった。池田はそれまで座っていたベンチから立ち上がると、ゆっくりと歩き出した。前に向かって。

吹きつけてくる風は冷たかったが、不思議とそれはむしろ心地よく感じられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4772f/>

曇り空の向こう

2010年10月8日14時49分発行